

ENCOUNTER

出会いの広場 No.13 1991.7

特集・中堅グループ臨床家の実際

● 特集・中堅グループ臨床家の実際

表現療法とエンカウンター・グループに

関する覚え書き……………矢幡 洋

アルコール専門外来から……………岸川 裕之

我が国におけるカウンセリング・

心理療法の発展……………伊藤 義美

● 研究ノート

大学生にとってのグループ・アプローチ……………池内 香

● 出会い百選(10)

『人間研究所ディレクター

スザン・スペクターさん』……………畠瀬 直子

● メッセージ・私の声

森の中……………坂野 剛崇

90年清里プログラムに参加して……………高松 里

清里、1990年8月……………門田 路子

アンデレホールへようこそ……………水田 勲

心気功を実践して……………山本 房子

● 連載・第1回

嵐のエンカウンター・グループ……………団 士郎

● おしらせ・情報・あれこれ

目次

出会いの広場 No. 13

ENCOUNTER



■特集・中堅グループ臨床家の実際
表現療法とエンカウンター・グループに
関する覚え書き

矢 幡 洋 1

アルコール専門外来から……………岸 川 裕 之 11

我が国におけるカウンセリング・心理療法の発展
ーロジャーズ、C.P.とジェンドリン、P.H.を中心にー…伊 藤 義 美 17

■研究ノート

大学生にとってのグループ・アプローチ……………池 内 香 25

■出会い百選(10)

『人間研究所ディレクター スザン・スペクターさん』…畠 瀬 直 子 30

■メッセージ・私の声

森の中……………坂 野 剛 崇 35

90年清里プログラムに参加して……………高 松 里 36

清里、一九九〇年八月……………門 田 路 子 38

アンデレホールへようこそ……………水 田 勲 40

心気功を实践して……………山 本 房 子 43

■連載・第1回

嵐のエンカウンターグループ……………団 士 郎 45

■おしらせ・情報・あれこれ

特集

中堅グループ臨床家の実際

● 表現療法とエンカウンター・グループに関する覚え書

矢 幡 洋

一

周知の通り、知的な洞察よりも、感情の表出に治療的な意義を認める治療法は多い。

だが、感情体験は、身体動作を伴うとき、更に生々しく体験される。粘土は、それを可能にする格好の素材である。

「粘土は怒りや攻撃を受け入れてくれる相手です。ガラスはなぐれば壊れてしまいます。金属をなぐれば逆にこちらが傷つきます。しかし、粘土はなぐっても破壊されることはありません。形をかえ

ることでああなたの気持ちに伝えてくれます。では、粘土にあなたの怒りをぶつけて下さい。全員目をつぶっていますので、あなたの怒りの姿は誰にも見られる心配はありません。」

しばらくすると粘土を撲る音があちこちで聞こえ始める。

「しばらく粘土に怒りをぶつけるうちに、ある手の動きがああなたの怒りを最もよく発散させることに気づくでしょう。それは、なぐるかもしれないし、ねじるかもしれないし、指でさすかもしれないし、ひきさくかもしれない。どの動きが一番あなたの怒りを発散させてくれるかみついたら、しばらくその動きをくり返して下さい。」
このような指示のもとで、粘土をあつかうと、怒りの身体表現と

一体になった手の運動をきわめて発見しやすい。何故なら、粘土という具体的な対象があるからである。身体運動に抵抗する他者が存在することで、怒りの感情の明確化はより一層助けられる。更に粘土は、対象が人間である場合とは違って、かなり自由な身体運動を許容するので、身体運動をも明確化する。

二

ワークショップで絵を描いてもらうと、描き終るや否や殆んど必ず質問がある。

「これで何がわかるのですか？」

つまり、多くの参加者は、描画を、「そこから、作者に関する何らかのデータを引き出すための手段」として——つまり、専ら診断の手法だと受けとるのである。

人々が、心理学というものが何か確たる答えをもっているものと想像したがつていること（しかも、一方的な託宣のような一義的解答）に気づいて、私はしばしば動転した。

人々は判断されたがつていた。行動することよりも、表現することよりも、ある不動な権威によってランキングのどこかに自分が位置づけられることを求めている。

三

人々は、「表現行為そのものを楽しむ」ところから、きわめて遠いところにいる。

四

つまり、我々の背後に暗黙の人間観が横たわっているのだ。

「人間は、ある権威（心理学かもしれないし、学校かもしれない）によって測定・診断されるべき存在である。」

「人間の行動は、ある規範に添うための行動である。その規範（模範学生であれ、模範社員であれ）にどれだけ合致しているかによって良し悪しが評価される。」

この人間観からは、「自己表現」というような行動はどこからもでてこない。

五

箱庭療法・絵画療法のセッションをくり返す中で、私に最もショックだったことは、殆んどの場合、人が「無難な」「あたりさわりのない」表現で切り抜けようとするのであった。最初私はいぶかしかった。やがて、腹立たしくなってきた。

もちろん、私のファシリテーターとしての姿勢が何かマイナスの作用を及ぼしている部分もある。箱庭療法を実作してもらう前に症例の紹介を置いていることが、会の雰囲気固くしていることもあっただろう。しかし、それにしても、「自由に自己を表現することへの恐怖」がいかに人々に強固な桎梏を課しているかに、我々はおののくべきである。

六

箱庭療法での作品を、いかにして自由なものにするか、私なりの知恵は絞った。症例検討のセッションのかわりに、カラージュ療法やイメージ絵画などの表現療法を入れてみたりした。箱庭作品を皆で解釈しようとするのではなく、そのイメージを更に増幅するよ

うな展開をゲシュタルトや心理劇を用いて試みた。だが、十分な手応えはなかった。

おそらく、もっと重要なことは、箱庭作品で、自己表現を自由に楽しむことのできるメンバーを増やすことである。そういうメンバーの、大胆なイメージ表出は、他のメンバーを勇気づける。

つまりは、箱庭グループも、グループとしてまた成長しなければならぬということなのだ。つまり、自由に自己を表現すること、他者の自己表現を尊重する態度、そういう態度を養っていかなければならぬのだ。そういう態度を育てる手段は、やはりエンカウンター・グループではないのか。表現療法が導入される前に、既にグループが成長していなければ、表現療法WSは決して充実したものにはならない。私の頭に、表現療法WSとベシックWSの交互的なサイクルというアイデアが浮かぶ。

七

「何のためにやるのですか？」「何の役に立つのですか？」「これで何がわかるのですか？」——絵を一枚かくたびに、執拗な質問が浴びせられた。まるで、「為されるあらゆることは目的をもち、役に立たなければならぬ」という掟がこの世にあるかのように。それは、殆んど強迫観念といってよい。

それに対して、私は、「今のは楽しくありませんでしたか？ それで十分ではないのですか？」と答えることはできなかった。「表現すること、イメージを表出すること自体に治療的意義があるので」とへどもどしながら答えていた。つまり、私も、「これは有用である」ということを、知的な言葉を通して伝えて納得してもらおうとしていたのである。私もまた、「有用性の掟」の中にあった。それとは異なる価値を提示する勇氣はなかった。

八

人々のネットワークづくりという実践的課題について、表現療法はEGにない利点をもっている。それは、表現療法がつくり出すものが端的に「もの」だからである。「もの」というメディアの特性を生かして、さまざまなコミュニケーション活動が展開しうる。例えば、陳列する。一つの作品を全員で講評し合う。交換する。

「もの」をつくり出す活動は、「趣味」活動になりうる。

趣味。この独特の活動がいかに大きなコミュニケーション形態を可能にするかは、鶴見俊介「限界芸術論」に詳しい。「共通の趣味」は様々な人々を結びつける。全国的なネットワークをたやすくつくる。遠い人々を会わせる。（人気漫画「釣りバカ日記」は、趣味のもつ、このコミュニケーション創成力を追求した作品といっていだらう。）

孤独な少年が町の将棋センターで見知らぬ労務者と将棋という媒介物を介して一時間ともに過ごすこと、私はそれを小さなことだとは思わない。

「もの」を介した集まりの利点は他にもある。それは、「イベント」を創成しやすい。絵画教室に講師を招へいする。展示会を行う。そのような、主に「多くの人に見せる」ことを目的としたパフォーマンスを案出しやすいため、新しい参加者を容易に集めうる。（ベシックEGはその本質上、「人寄せ」のためのイベントはできない）

九

また、「もの」を介した集まりのもう一つの利点は、オルガナイ

ザー（ファシリテーターというべきか）を大量に育成することが容易だからである。もちろん、モノにもよるが、ベーシックEGのファシリテーター養成よりは短期ですむ。こういう人達は、普通「インストラクター」と呼ばれているが。

十

しかし、「もの」を介した集まりの最大の欠点をあげなければ不公平であろう。

「もの」の世界は容易にヒエラルキーをつくりだす。「一流」「二流」「ブランド」「プロ」「アマ」「キッチュ」等々。「もの」によってコミュニケーションすることではなく、他者との差異を強調することに重点が置かれはじめる。「二流」の「もの」に対する軽蔑や権威の盲信という心情は、多くの「マニア」の底に流れている。

そのとき、「もの」はコミュニケーションの手段ではない。「もの」が人間を差異化し、意識は「もの」に支配される。

十一

ふりかえてみると、私もまた、「もの」を媒介したネットワークづくりを試みたことがあるのだ。

三年前になるが、一頃絵本に凝っていて、毎日図書館から絵本を十冊貸りては読んだ。千冊以上は読んだだろう。

「絵本」の集まりをもちたいと思った。葉書にワープロで案内をうち、大量にコピーして、幼稚園・保育園あてに送りまくった。「絵本文化研究会」と銘うった。ある精神科クリニックの待合室を借りた。診療時間が終わったあと、家で塾を経営している大学生に机と椅子を運んでもらって、あちこちの図書館から貸りてきた絵本をテ

ーブルに積みあげた。

絵本の、メディアとしての特性を生かしたグループを考えていた。つまり、「その場ですぐに読み終る」という特性。参加者が、たった今読んだばかりの絵本について語りあえること。

一回ごとに一人の絵本作家に定めた。最初に、テーブルの上の絵本から気に入ったものを各自選んでもらうフリータイム。それから私が各絵本作家について私見を述べ、あとは、フリー・ディスカッションをやる。お菓子と紅茶は毎回用意した。

佐野洋子、ウングラー、長谷川集平、と三回の集まりでこの試みは終了した。一回につき十名前後の集まりで、郵送費にひきあわなかった。各図書館から絵本を貸り集め、机と椅子を運び、私宅から二時間かかる会場までかけつける。準備が大変すぎた。しかし、中断の最大の理由は、三回目に、フリータイムで、参加者が黙々と各自絵本を読んでいる最中に、二人の初参加者が席を立てて出ていってしまったことである。何故だかわからないがショックであった。初参加者の退席について、あとで様々な意見がでた。「黙って絵本を読みあうだけの集まりだと思われたのではないか、進行プログラムを書いてはっておけばよかったのでは？」という意見もあった。しかし、私はショックから立ち直れないでいた。次の会の集まりを準備する力は失せていた。後になって、参加者から、「絵本の集まりはよかった。あれはもうやらないんですか？」と何度も言われた集まりではあったが。

十二

「表現」「もの」を媒介とするネットワークに、私は少くとも次のような人が集まることを期待している。

(一) 表現行為によって、自己を解放したいと願っている人。

(一) 表現行為そのものを目的とし、表現技術を向上させたいと願っている人。

(二) 表現行為を教育の手段として用いている人。

(三) 表現行為を治療や組織化の手段として用いたいと思っている人。

(四) 職業的に表現行為に従事している人。

絵画を例にとれば、(一)は、治療的WSに参加したい人、(二)は絵が好きな人、(三)は保育・教育で絵画指導をする人、(四)は芸術療法家や施設のレクリエーションに絵画を取り入れたいと思っている人、(五)は画家。

こういう多様な志向をもつ人々がつどい、そこから何かが生まれる創造的な場所。私はまだその夢を捨てたわけではない。

十三

表現療法や身体接触技法の集団への適応には、年齢層によって差異がある。

小学校上級ぐらいから、ある微妙な年代がある。箱庭療法に対して「子供っぽいことをやりたくない」と忌避する年代である。この年代はまた、身体接触技法に対しても、もはや子供時代のノリを示さない。この年齢層には、表現療法としては、マーブリング画（彼らは熱中を示し、またでき上ったマーブリング画に盛んに投影を行う）、そしてカラージュ療法（知的な要素があり、かつ、成人の雑誌に触れることができる）が適用しやすい。この年代はまた、将棋・囲碁・トランプなどのゲームに親和性があることには注目しなければならない。サリバンが言うごとく、これらのゲームは、一定の距離を保ちつつ対人接触を可能にする形式として、対人的に過敏な人には貴重な小道具である。

いわゆる思春期を過ぎると、「レクリエーション」などという場面設定さえあれば、身体接触技法にはそれほど抵抗を示さなくなる。しかし、表現療法に対する反応は、成人男性と成人女性には大きな隔りがある。描画に対する成人男性の忌避は強い。女性は、子供と接触するということが我々の文化内では自明のことと仮定されているようで、男性が「幼稚園みたいなこと」と忌避することに、全般に女性には抵抗を示さない。描画行動が専ら子供文化に属するといふのは奇妙な文化的通念であるが。

老人は、「子供文化に属すること」とされる物事に必ずしも抵抗を示さない。彼らは、存外に演劇的技法に親和性をもつ。老人は笑いに對して開かれている。（心理劇が様々な病態に對して幅広い適用をもつことは評価しなければならない。精神病院の断酒会で心理劇の監督をつとめてそれを痛感した。殆んど自発的な表現のできない病者が補助自我の代弁によって、次第に表情がでてきて、遂に自ら語り出した場面は印象に残った。）

十四

表現療法の根源的な意義は、体験が、「もの」という客観的な形態で外化されることである。このことを最も決定的に指摘したのは解釈学哲学の祖デールタイである。

「表現という不動の形態において、生自身の中でたえず流れ去ってしまう境界が明らかになる。」

「人間は自分自身の表現を通じてはじめて自己自身を了解する。」（ボルノー「ディルタイ」）

エンカウンターは、体験を概念によって表現する。表現療法は言語以外の記号によって体験を表現する。

ここから、体験と、それを表現する記号の関係について、私達は

思索の道へといざなわれる。

十五

健康者においては、否定的なイメージのない描画は、必ずしも自己洞察をもたらさない。「世界をつくる」という技法がある。数名がそれぞれ絵をかいたあと、それを模造紙の上に配置し、模造紙上に絵をかきたす。一人が「湾岸戦争」をイメージした赤と黒の絵をかいていた。その否定的イメージが、集団の中で弁証法的な動きを呼び起した。そのイメージを中心に、他メンバーが触発されたかのようであった。

描画において、他者の表出した否定的イメージからも、ダイナミックスが生じうる。共同描画の一つの意義はそこにある。

十六

描画表現において、他者の表現したイメージが、他メンバーに影響を及ぼすプロセスはきわめて興味深い。EGでは、言葉が影響を及ぼすが、ファンタジー・グループでは、造型表現が対人知覚を規定する。共同描画は、グループのプロセスについて、別な知見を提供するだろう。

十七

短い期間のものではあるが、私の活動の変遷をふり返ってみると、それは、沖縄社会に対する一つの地域実践の試みではなかったかと思う。

まず、絵本文化研究会と高崎明氏を横浜から招いての演劇WSが

その皮切りであった。私は、「どんな参加者が来るのか予想できない」という事態に怖れを感じていた。絵本文化研究会は、幼児教育関係者にしか案内を出していなかったから、参加者の層は限定されているはずだったが、それでも、不特定多数に参加を呼びかけ、何がしかのものを求めてつどってくれる人々に対して、その期待に応えなければならぬ立場に立つということは怖かった。

高崎明氏WSは、他人がファシリテーターとして矢面に立つてくれるという気安さがあり、宣伝には精出した。

その後、大学、公民館などで、何度か無料のWSをファシリテートした。内容は、構成的エクササイズと心理劇であった。

その後、高崎明WS、無料WSの参加者などに案内を送って、有料の三日間通いWSを企画した。

経験あるファシリテーターと組みたかったが、単独でやらざるをえなかった。

「清水の舞台から飛びおりる」心境であった。案内先を限定していたので、一種のクローズ・グループであった筈なのだが、初顔の参加者もいて、足がすくんだ。

その後、「イメージと絵画」「心理劇」「ベーシックEG」「センサリー・アウェアネス」「ロール・プレイ」「ゲシュタルト」「ボディ・ワーク」「芸術表現療法」と回を重ねた。しかし、労力と案内郵送費が膨大なわりに、参加者は少なかった。

参加者が少なかったことには、もちろん私のファシリテーターとしての力量不足もある。だが、一方で、地方新聞社のカルチャーセンターで行った「イメージ心理学入門」「カウセリング入門」は私が面くらうほど多数の参加者があった。私は、人々は、「自ら何かをする」ワークショップよりも「一方的に知識を与えられる」講座・セミナーに足を運びやすいらしい、という事態がおぼろげにみえてきた。そして、「カルチャーセンター」主催の企画であること、

大学教授というようなブランドがあることが、人を集めるらしい、とわかった。つまり、①「人が勉強する場所」とされている公認の場所。②「講義形式」という、何が行なわれるかあらかじめわかっており能動的参加が要求されず、ただ受身でいさえすればよい形態。③肩書の権威——このようなパッケージに包まれており、あとはただ金を払って受けとりさえすればいい、という「商品」が最も多くの人々をひきつけるのだ。どうやら、「でき上ったものをただ待つという消費者」という姿勢は、現代人の行動様式を深く規定しているらしい。

十八

ワークショップを私は遂に断念した。私には生活がかかっていた。人を集める手段をなんとかして講じざるをえなかった。

「対人関係をみなおす」「自己発見」など、私のWS案内には書かれてあった。これでは、あまりに漠然としすぎているのだろうか？ 私は、実用性に絞ってみれば、少なくともそれを必要とする参加者が訪れるのではないかと考えた。

精神病院で入院者のレクリエーションを担当していたこともあり、レクリエーションや簡単な造型法、音楽ゲームなどはどうしてもやらなければならなかった。ついでに、ということ、で、「集団づくりのためのコミュニケーション・ゲーム」「音遊びによる音楽教育」などのWSを企画した。

新聞の催し物欄に広告を出し、参加時間も一〜二時間と手頃なはずだったのに、何度やっても参加者が十人にならなかったのは意外であった。「音遊び」は小・中・高の音楽担当教諭に網羅的に案内を送ったのに、全く反応はなかった。

この時は、本当に困り果てた。

十九

私の連続ワークショップによって、継続的な日常グループが育っていたのか、というと、そこには至らなかった。「会」としては私がWSの案内を出し、そのつど参加者がつどう、という活動があるだけであった。WSの内容も、参加者の要望に応ずるというより、私が東京に行っては学んできた技法をできるだけ多く紹介する、という一方的なものにすぎなかった。WSの案内作成や宣伝等の雑務も、私が中心となって遂行し、一人でできない分を学生参加者などに頼む、という形でしかなかった。私はよく、「この会を支えてゆこうとするメンバーが現れない」とこぼした。

しかし、「主催者」と「お客さん」という固定的構造をつくり出していたのは私自身ではなかったのか。たしかに、私は、本土の学習で、新しいものを少しでも多く持ちこみたいという熱意はあったが、いつの間にか「技術提供者」の立場になっていたのではないかと「別に私個人のファンになってもらおうとは思っていない。WSから、各人が役に立つものを各自持って帰ってくればそれでよい」と私はよく言っていたが、ふり返ってみれば、人間関係そのものをつくってゆくという問題意識は私に希薄であった。そのことはかなり時間がたってから気がついた。だが、あまりにも私には余力がなかった。

二十

状況が一変したのは、とあるクリニックを会場に、「箱庭療法入門講座」を連続で開催した時だった。問い合わせが相次いだ。私は、箱庭のもつヴィジュアルな効果を期待して、参加者に「おもしろか

った」と言ってもらえるWSをやることを考えていたのにすぎなかったので、予想以上の反応に驚いた。

箱庭療法が、マスコミでかなりとりあげられ、よく知られていることによるのであろう。

二十一

同じクリニックで心理学のセミナーを連続して開催するようになり、やがてそれは盛況となった。「カウンセリング入門」「交流分析入門」「性格心理学入門」「ユング心理学入門」「自律訓練法入門」「フロイト心理学入門」——まさに知識の切り売りである。知的なエンターテイメント、と私は割り切った。無節操といわれてもしかたがないが、必ずしも自分が共鳴していない理論のセミナーまでやった。(ずば抜けて参加者が多かったのはユングであった。)

現代社会の知の構造が垣間見えたような気がした。その時々の流行の知がマスコミ上で断片的に浮遊する。「ユング」「トランスパースナル」そういったコトバをどこかできいたことがある、という人は数多い。人々が最も関心を抱くのは、そういう売り物用の知なのである。

二十二

しかし、それにしても、「心理学」という言葉は、人々に、殆んど神秘的としかいいようのない願望を抱かせているのである。人々は、そこには、既に、確実な答が用意されているものと期待している。自分は何ものなのかの決定的な解答や、身近な対人関係の処理のノウハウや、社会現象の解明に至るまで、なにか権威ある照準がそこにはあると考えられているのだ。

ここには、深刻な問題が秘んでいる。つまり、宗教を背景にした絶対的価値基準が崩壊した「神なき時代」において、人々は心理学にかつての宗教の期待をしているのである。少なくとも、価値基準が提示されることを求めている(そして、心理学も、宗教的価値にかわる価値規範を提示しようとしている——「自己実現」「十分に機能する人間」など)。心理学者は「神を演じる」ことを期待されているのである。

そして、心理学者の内面にも、「神を演じたい」という願望が生じる。他人の苦悩をマジック・ハンドによっていやすこと。「無意識」「潜在願望」というような(たいていは中途半端な知識しか背景にないのだが)神秘的な片言の前に相手が平伏するのを眺めること。こういった力を身にまといたいという誘惑から身を遠ざけるためには、実は、強い精神力を必要とする。(その誘惑から最も遠かった人は、ロジャーズであろう)

世俗宗教としての心理学。その祭司としての心理学者の精神的傾向。私は、この視点は重要だと考える。

二十三

こうして私の活動をふりかえてみると、WSから実用志向の実技指導へ、そして専ら知的なエンターテイメントを目指したレクチャーへ、とEGからますます遠ざかる方向に歩んできた。それは、人を集めることに生活がかかっていただけにやむを得ない軌跡であった。だが、人々にいかにより多数に働きかけられるかを工夫するという過程は現代社会のありかたにかかわりあう実践活動であったと思う。手狭な範囲ではあれ、私には現代社会というものがおぼろげにみえてきた気がした。

ところが、逆説的なことに、このような軌跡をたどるうちに、私

の中には、「今こそベーシックEGを！」という気持ちが強まってきた。

知的なレクチャーでも、参加者は、必ずしも好奇心でくる人ばかりではない。レクチャーが終ったあとに、「体験実習はどこでできるのか?」「カウンセリングを受けたいのだが……」という真剣な質問が何度となくぶつけられた。そういう時に、「この人が求めているものが得られる場所はベーシックEGだ」という気持ちが強く湧き上った。おそらく彼らは、じっくりと語りあえる場所をもっていないのである。「話をきいてもらえる」セルフ・ヘルプ・グループを必要としている人々は、実は、多いのではないだろうか?

二十四

沖繩を去る二十日前、私は十六時間のベーシックEGを主催した。久々のベーシックEG体験は私にいろいろなことを考えさせた。ただ一つのことを記しておこう。ベーシックEGにおいて、参加者に劇的な変化が訪れることがあるのは周知の事実である。私は、かかる現象は、哲学者のボルノーが「教育の非連続的形式」として指摘した事象と共通する点が多いように思う。

普通、教育とは、あらかじめ設定された計画にそって、学習者が連続的・漸進的に成長してゆく、というイメージでみられている。だが、ボルノーは、突発的な危機や飛躍的な変化など、「計画されたゆるやかな進展」とは異なる現象が成長の途上に多いことを指摘する。

ボルノーは、「教育の非連続的形式」として例えば、危機・覚醒・出会いをあげる。それらは、共通して次のような特徴をもつ。

- (一) それらの事象は、突然的であり、予期せぬ時に人を襲う。
- (二) それらの事象は、その時以前の状態から質的に新たな状態へ

と、人を移行させる。そのため、以前の状態が「断絶」されるかにみえる。

- (三) それらは、あらかじめ予定することも、計画・管理することもできない。

四 非連続的事象を成長促進的なものとして生かしうるかどうかは、確実性はなく、「恩賜」とでもいうべき偶然的なものである。

こうしてみると、「非連続的形式の教育」はベーシック・EGにおける劇的な人格変化の現象によくあてはまる。ボルノーのいう通り、それは、意図的に設定することはできない。だが、そういう非連続的事象が往々にして生起するという事実を見逃すことはできない。

ボルノーは、非連続的事象において人は単独者であり、教育者は突発事象に対しては無力である——だが、危機のさなかの単独者を助力することは可能である、と一見矛盾した主張をしている。(たしかに、そういう瞬間の中にある参加者の表情は、周囲世界の一切が失せ、覚醒の光に照らされている。その時、周囲の声は彼に届かず、介入は不可能である。)

これは、ファシリテーターの成長促進的な機能に関して様々な指摘を与える。

二十五

全く非日常的事態にある人への援助——臨死、精神的発病、死の決意——何が必要なのだろうか? おそらく狭義の「カウンセリング」だけでは不十分であろう。「危機介入の技法」ももちろんありえようが、最も危機のさなかにあつては、用意された方法は無力となる。その時、危機にともにあずかろうとする人間もまた、そのあ

りかたが問われるのであり、彼もまた実存的瞬間の中に立たされるのである。

二十六

危機のさなかにある人間と危機を共にすることは、ある絶対性に触れたという揺ぎない確信をもたらすのだ——私は神秘主義者のだろうか？ それを意識的に求めることは誤っているということを中心久夫から学んだはずなのに——。

二十七

エンカウンター運動の性格を歴史的視野の中で位置づける——運動の意義を更に深めるためには、そのような作業も必要であろう。

まず、過去の方向に目を向けよう。時間の軸を長くとり、思想史に目を向けるならば、エンカウンター運動の先輩は二十世紀初頭のドイツ青年運動であると私は考える。いずれも、産業社会の進展からくる、効率第一主義、功利主義、科学崇拜、人間の絆の希薄化などに対する批判を根底にもつ。エンカウンター運動がその方法としてEGをもつように、ドイツ青年運動もまた、ワンダーフォーゲルという独自の小集団活動を創出した。それは、集団歩行という身体運動を基軸として、自然と対人との、コミュニケーションな交流を目指すのである。

二十八

エンカウンター運動の哲学・思想史上の同盟者はディルタイからガーダマーへ続く解釈学哲学において他にないというのが私の秘か

な信念である。だが、これは今後の課題である。

二十九

現代という時代と社会の中でエンカウンター運動はいかなる社会的意義をもつのだろうか。この問題については、本誌12号において小柳晴生氏が「現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義」で真向から説得力のある議論を展開しておられ、また、期せずして福井康之氏もゲシュタルト・セラピー体験記の最終回で独自のエンカウンター運動論を展開しておられる。いずれもユニークな視点を提供した興味深い議論であり、「エンカウンター運動の社会的意義」という課題に向う問題意識の収斂するのが感じられる。

私には新しい論点を提供する力はないが、他の思想的系譜の中でエンカウンター運動がどう位置づけられているのか一例を紹介したい。

ドイツ現代思想の一潮流フランクフルト学派のハーバーマスやオットー・フーコーらは、現代の対抗文化運動の性格を総括しようとする努力が続けているが、彼らは「新しい社会運動」の中の一つとして、「精神解放運動」をあげ、エンカウンター運動もその一つとして数えている。（最近のトランスパーソナルWSもこの中に入るだろう）

ハーバーマスによれば、「新しい社会運動」は「生活形態の文法」を変えることを目標に置く。そして、その特徴として、「対抗世界の熱烈な希求」「権威主義的業績達成社会の諸拘束への批判」「疎外なき関係性を目指す同盟的交遊の模索」をあげている。

これらの包括的な性格づけがエンカウンター運動の特質にどこまであてはまるかさだかではないが、異なる思想的系譜からの視点として参考になるものをもっていただろうか。

やはた よう

●明治生命厚生事業団体力医学研究所

● アルコール専門外来から

岸 川 裕 之

一、はじめに

一五年間勤務した単科の精神病院から開院四年目を迎えた現在のアルコール専門外来に職場を変わったのはこの一月である。クリニックは無床の診療所で一日約七〇名の来院者がありその九〇%以上がアルコール症者である。クリニックの治療方針としてアルコール症は糖尿病、高血圧症等と同じような慢性疾患であるという視点に立っている。従来の急性疾患用の治療形態が、受動的な来院者の在り方を作り出してしまい依存を容認、強化してしまっているのではないかという疑問から、自らの病に主体的に関われる様になることを援助する、ということを中心にした治療プログラムに添って治療が進んでいる。

今回のレポートはクリニックの治療プログラムの説明をしながら、筆者が日頃感じているアルコール症の印象について報告していきたい。尚、私のアルコール症者との付き合いは一四年目に入っている。

クリニックは神戸の繁華街にあり元町駅から南に徒歩三分、中華街として有名な南京町の西隣、ビルの五階にある。スタッフは医師（以下Dr）一名、看護（以下Ns）四名、受付事務三名、ケースワーカー（以下Cw）一名、回復者カウンセラー一名、臨床心理士（以下Cp）一名と非常勤の医師、臨床検査技師各一名である。

二、治療プログラムについて

図一は週間予定表であるが大まかに分けると、(1)アルコール症についての知識・情報を伝達する教育プログラムとしてのアルコール症講義、酒害教室、初診者教室、家族会、(2)自己洞察と相互の交流を目的とした院内例会、小グループ・ミーティング（以下Gm）、患者交流会、夜間集会、家族会、(3)リラクゼーションを目的とした自律訓練法、料理教室を含むレクレーション、(4)特別プログラムとしてのマリッジ・エンカウンターグループ、アダルトチルドレン・ミーティング、(5)一般診療、個人面接ということになる。

治療プログラムは主にグループを中心として行なわれる。アルコール症者は薬物に対してだけでなく多くの場合、対人関係において、また社会との接触において依存的関係を持ちやすい。それは治療者、患者（以下Pt）関係の中にも当然ながら持ち込まれ、これに巻き込まれると関係そのものが飲酒を促進させることにもつながってしまう。言い換えればアルコール症との関わりは適切な治療的距離をいかに作り出せるかということになるうか。アルコール症者は依存的関係に持ち込むのがうまく、個人面接の中で適切な距離を維持していくのは難しい。その面からもグループを中心とした、またはグループと個人的関わりを平行させた関わりは意味があると思われる。次にそれぞれの内容について説明する。

三、一般的プログラム

(1) 初診者教室

週間予定表					〈日曜診〉	〈夜間診療〉		
月	火	水	木	金	第一日	月	火	
9	GM	GM	酒害教室		合同家族会	6	AT マリッジEG	
10						7	夜間集会	AA メッセージ
11	GM	GM	酒害教室	院内例会		8		
				患者交流会				
12	初診者教室1	初診者教室2	初診者教室3	初診者教室4	合同院内例会	GM：グループ ミーティング AT：自律訓練法 SM：スタッフ ミーティング アルコールセミナー ：関係者学習会		
1	院内例会	GM	女性GM	自律訓練法		アルコール症講義		
2						家族会		
3			SM	アダルトチルドレン・M				
4	SM		アルコールセミナー	SM				
5								

GM：グループミーティング
AT：自律訓練法
SM：スタッフミーティング
アルコールセミナー：関係者学習会

図1 アルコール専門外来のプログラム

初診者はインテイク面接の後、診察が行なわれそのまま初診者教室に参加する。初診者教室はCWとCPが担当し、家族も参加するプログラムで、①心理検査、②オリエンテーション、③アルコール症についてのビデオ学習、④自助グループについての紹介ビデオを四日間掛けて行なう。毎日ほぼ一人の新患があるので、毎回四〜六名の参加がある。ビデオの後には感想を聞きながらミーティングが行なわれ、心理検査は後日フィードバックされる。丁寧なアプローチをするほど治療からの早期脱落が少なくなる。アルコール症は家族の病いといわれているが、家族は被害者意識が強くPtに対して攻撃的になりやすいため、その攻撃に必要な以上に曝されないよう配慮している。

心理検査はYGとバウムテストを中心に行なっている。YGでは、D型とE型がほぼ同数でありD型の特徴として理想的な自己像に固執して現実の自分をみようとしないタイプが多く、E型に比べ回復が難しい印象を受けている。アルコール症は否認の病気とも言われ否認を克服する所から治療が始まると言われているが、その一端が表れていると思われる。

バウムテストでは柿の木の下に注目している。本人の約四割、家族の二割以上が柿の木を描いている。つる系の木は以外に少なく一月からの一六三人中六名だった。なお前任の精神科ではアルコールの入院治療をしていたが、テストで見えるかぎり人格水準や性格傾向に差はみられないように思われる。

(2) グループ・ミーティング

GMは六グループに分かれ内一つは女性ミーティングでありPtは週一回どれかに参加することになっている。基本的には酒害者本人の会であるが、初診間もない家族には参加してもらっている。CW、CPが交替で担当しNsも参加する。一グループは七〜一六人前後

で毎回テーマをもうけていて、全員がテーマに添った発言の後ディスカッションが行なわれる。参加者は初診者、スリップを繰り返している者、一年以上断酒継続している者まで様々である。

最近のテーマとしては「家族と自分」「自助グループと私」「仕事と断酒」「私の子供の頃」「性格について」「スリップ」「飲酒生活の苦しみ」等であるが、それぞれ自身の体験談を話す、自分を語ることが求められ、他者に対する批判、攻撃は行なわない。グループ内では相互のサポートもしばしばみられ、初診者にはスタッフの配慮がある。

アルコール症者には洞察力の弱さが見られることが多いが、急激な洞察は、自殺など事故の危険性が憂慮されるため、三年ぐらいを目処に緩やかに行なわれる配慮が必要であり、その点からもテーマを持ったミーティングは意味を持つと思われる。

女性GMは断酒会ではアメシストと呼ばれているが、性にまつわる事柄など男性の中では話されにくい問題について語られることも多い。女性のアルコール症は今後一〇年間で急激に増加するのではないかと予想されている。

(3) 院内例会、夜間集会

院内例会は週二回行なわれる本人と家族が参加する体験発表の会で、一定の期間断酒継続しているPtが持ち回りで司会をし、CWがサポートしている。毎回約五〇名の参加があり、発表の中には深い洞察にもとずいた自己開示が見られ、その体験内容の壮絶さもありまって参加者の感動を呼ぶ場面がしばしば登場する。

夜間集会は断酒会とAAとの交流を目指した集まりで、司会は各自助グループが交替で行ない、断酒会色、AA色を薄くした会合を目指している。断酒会は昭和二八年、AAを参考にしながら日本流にアレンジした会であるが、歴史と共に二者は目的を同じにしながら

も交流がなかなか見られなかった。以前は「あの病院はAAが取った、この病院は断酒会が押さえた」等と言う会話が聞かれたほどである。

(4) 患者交流会、AAメッセージ

断酒会、AAにこれから参加する或いは参加間もないPtとそれぞれの会員の交流の場で、自助グループへの参加を促進するためのプログラムである。アルコール症医療の中では自助グループを抜きにした治療は考えにくく、抱え込むのではなく、寧ろ自助グループへの繋ぎと考えるのが自然である。しかし、参加間もないPtにとっては既に断酒している者と自分との距離が大きく感じられ、とけこみ難い印象を持ってしまう事による参加中断者は可成の数に登る。断酒会、AA共に基本的には自己開示の場であるのだが、飲酒生活から遠ざかり、生活の安定を取り戻していくにつれ、メンバーにとって集まりがソーシャルな面を持ってしまいうようになる。このため、入り口に立っている者からは入りづらさを感じてしまい発言内容も表装的となり、断酒直後の不安定な自分が表現出来なくなってしまう。この様な距離を縮め会への参加を支えていくためのプログラムとして用意されている。尚、AAメッセージに関しては匿名性を尊重しクロージドで行なっている。

(5) アルコール症講義、酒害教室

アルコール症講義はDrが精神医学的立場から、身体、生活、社会的な面を含む広範囲な講義を行ない、CPが心理、家族力動の立場からの講義を交替で行なっている。酒害教室はDrが行なう一回シリーズの講座で両者は講義とゼミの関係といえようか。知識偏重になることは避けねばならないが、アルコール症に対する正確な情報を持つ事は治療上大きな位置を占めている。

一般的なアルコール症に対する認識は、路上でアルコール臭にまみれながら横たわっている浮浪者のイメージであり、一杯飲むことにより手の震えが止まる人の姿である。このような誤解にもとずいたイメージが治療導入を遅らせることにつながっている。

アルコール症の中で飲酒の結果、暴力や暴言で周りに迷惑を掛けるいわば反社会的行動を持つ人や、幻覚、妄想、手の震え等の精神症状を呈する人はごく一部であり、殆どの人は派手な症状も示さないまま長年の依存的な習慣飲酒の中で静かに、社会的、家庭的、身体的崩壊に向かって行っている。

アルコール症治療の中ではアルコール症は病気であるという言葉が使われる。アルコール症の人と話していると時々気力で止める、あるいは意志（意地）で止めるという人がある。これは周りから酒がやめられないのは意志の弱さの問題だと指摘されることが多いからであるが、むしろアルコールに対して無力で在る自分を認める所から回復が始まる。

(6) 家族会

家族会は孤立しがちな家族が自らの体験を話し共有する場で、CPから家族向けのミニレクチャーや、コメントも出すようにしている。アルコール症は家族の病いであり、多くの場合家族もPtのアルコール症の一端を担っていることが多いが、家族にとっては家庭内の問題は全てPtのアルコール問題に還元され、一方的な被害者としての認識しか無いことがほとんどである。Pt、家族とも目標が断酒のみに向けられ、断酒が出来れば全ての問題が解決すると思いがちだが、実際にはアルコールの影に隠れていた様々な問題が表れて来るだけであり、断酒後の問題の重さの方が大きく、その重さに耐えられなくなってしまい再飲酒、あるいは再飲酒に協力するような動きになる事がある。家族にとっては、相手の事としてではなく、

自分の問題として考えて行けるようになることは意味がある。先日
の会で、「主人の飲酒は六割私に責任がある」と話す家族がいた。
断酒出来始めた家族の中には腫物に触る様にPtに接する人がいるが、
それでは家族関係の改善が進んで行かない。自分の話が出来る
とPtの断酒も安定してくる様である。

(7) 合同家族会、合同院内例会

この二つは第一日曜日に行なわれる通院者以外の人も参加する会で、既に長期間断酒継続している人も含め八〇名ほどの参加がある。
以上が一応通院者全員が参加するプログラムである。次に希望者が参加する特別プログラムの説明をしていく。

四、特別プログラム

(1) マリッジ・エンカウンター・グループ

マリッジEGは断酒後一年以上経過した夫婦の会で二グループ各八人、それぞれ月一回クローズドで行なっている。オリエンテーションでは一般的な説明と共に①EGの内容を夫婦間のトラブルに使わない、②お茶などは全てセルフサービス、③秘密の保持、の三点が特に約束された。秘密の保持を特に強調したのは、一般のアルコールミーティングでは外部に対してはそこそこ秘密は守られてはいるようだが、内部ではあまり厳密ではなく、マリッジEGがよりパーソナルな内容を語れる場である事を保証するためである。セルフサービスについては役割依存をなるべく持ち込まないようにするためだった
が、グループが深まるにつれかえて不自然になってきている。

EGの目的は夫婦関係の改善にある。アルコール症の夫婦では断酒後二、三年を経過しても関係が改善されず、ただの同居人と云った姿はかなり多く見られる。多くの場合結婚当初からアルコール問

題を抱えており、Ptは生身で家庭の事柄について関わりを持った経験に乏しく、配偶者は一人で切り盛りするのが当然のようになっていく。夫婦生活にしてもあるPtは「しらふで関係を持った事がない」と言っている。

グループの経過を見ると、開始当初は夫婦単位の話が中心だったが三回目辺りから性について語られるようになり、半年を過ぎる辺りから個人のことが語られはじめ、結婚前の自分や家族、子供の頃の親との関係等について話が広がり、それにつれて一人の個人として配偶者の話が受け止められるようになりつつある。(筆者は囑託として一年前から勤務しており、マリッジEGは一九九〇年九月から開始している)

(2) AC・ミーティング

AC (アダルトチルドレン・オブ・アルコールリック) はアルコール症者を親に持つ成人した人たちの会で、三〇代前半までの何らかの適応障害を抱えて通院しているPtを対象としており、院内ではヤング・ミーティングと呼んでいる。参加者は、自身がアルコール症の者、ギャンブル依存、シンナー中毒、摂食障害、境界例等である。

アルコール症は家族内で再生産されるといわれ、現にアルコール症者の家族歴を聞いてみると親がアルコール症であったり、かなりの問題飲酒者である例は多く見られる。親のアルコール問題が子供にどの程度影響を与えるかは、酒乱型なのか、おとなしいタイプなのか、経済状態、配偶者の心理的安定度、出生順位、男女、影響を受けた年令、また社会背景や、体質も含めた遺伝的要因も考えなくてはならないが、乳幼児期も含めた子供の成長過程に大きく影を落とす事は否定出来ないと思われる。

ACへの関わりとしては、ある自助グループの中の子供会を筆者

が担当し四年目を迎えている。月一回の開催で毎回六〜十二名の参加があり、年齢層は三〜一八才までと幅がある。発足当初は中学生以上を対象としたミーティングを目論んでいたが、開始早々から小学生が中心となり遊びが中心になっている。

アルコール症者にとって一番の関心は断酒にむけられ、酒害の渦中では勿論、断酒後も断酒継続にエネルギーを費やし子供の問題はなかなかその視野に入らないことが多い。

子供の傾向を参加者に限って言えば、女の子では不正が許せず勝ち気な優等生タイプが多く、柔らかなさの表現が苦手な傾向が見られた。男の子では自分をコントロールする力、耐性の弱さ、状況への適応の拙さが見られる事が多く、他のメンバーにスケープゴードにされる場面がよく見られる。これらはアルコール症の夫婦間にみられる一つの典型的な役割に似ている。

遊びの中では、感情の発散、表出、適度な緊張場面の経験、大人から守られていることの経験等をイメージしており、EGで用いられるエクササイズを子供向けにアレンジして使うことも多い。

参加者は、当然ながら断酒会に所属し断酒しているか、スリッパしながらも断酒を目指している家族で、言わば一応の安定を取り戻しつつある家庭の子供たちであり、酒害の渦中にある子供の参加は無い。医療の従事者として問題を起こしていない子供の事柄にタッチして行くのは、慎重でなければならないと思っているが、子供の置かれている状況は悪く、特に酒乱タイプの家庭での状況は想像を越えるものがある。

(3) 自律訓練法

アルコール症は否認の病いと表現されるが、洞察力の弱さはかなりの人にみられる。面接時に子供時代の事柄に水を向けても断片的な事実が少し話されるだけである。語りたくないのではなく、語る

内容が見つからないという人が多く、精神生活の貧しさが見られ、当然感情レベルの問題にまでは話が進まない。アルコール症者は関心の方向が自分の外側にあり、内面に向かいにくい傾向がある。自律訓練の導入は静かに自分のからだ、内側の出来事に眼を向ける事を通して、洞察力の回復を目論んだからである。

売り物は、アルコール症につきもののイライラ感、不眠の解消で、「寝入り端の気持ち薄らいでいくボーとした、あの心地よい感じが何時でもなれる」「お酒が無くてはほろよいの気持ち良さが味わえる」で、本人だけでなく、家族の参加も増えつつある。

アルコール症治療で瞑想はよく使われているが、あるPtは「今まで瞑想とは色々思い出して反省することだと思っていたが、瞑想の意味がやっと解った」と話していた。また、眠剤が要らなくなった、久しぶりに熟睡感があったとの報告は多い。

五、今後の課題

アルコール症は暴言、暴力等の反社会的行動により周囲に迷惑がかかる直接問題行動型と、幻覚、幻聴等の精神症状も特になく、家庭や職場でもトラブルが少ない静かなタイプの間接問題型とに分けることが出来る。治療の場に訪れるのは前者が中心で、後者はアルコール問題がベースにありながらもアルコール症としての治療機会を失い、静かに家庭的、社会的、身体的崩壊に向かって行く。この間接問題型へのアプローチとして現在アルコール症デイク・プログラムを用いながら内科など他科とのリエゾン治療を試み始めているが、これについては別の機会に報告させて頂けたらと思っている。

六、おわりに

アルコール症は間接的な疑似体験の世界にすんでいるように思われる。現実の煩わしさに対し、薬物であるアルコールによって非日常的な意識状態の中に身を隠してやり過ごそうとしている。アルコール症は現代人を象徴する病いではないだろうか。

アルコール症は切ない病気である。アルコールを切っただけでは何も問題は解決しない。それどころかアルコールに隠されていた様々な問題が断酒後に噴き出してくる。Ptの中にはそのしんどさの為に再びアルコールの中に逃げ込む人もいる。早すぎるアプローチは危険が大きく、噴き出し方を小出しに抑えながら、数年を掛けたPt、家族、治療者の共同作業が必要になってくる。これまでアルコールで埋めていた心の穴、虚しさどう付合っているのか、関わる者の配慮がいる。

参考資料

- (一) 齊藤 学…アルコール臨床における外来と入院、アルコール医療研究 四・二五―二五七、一九八七
- (二) 辻本士郎、植松直道、小杉好弘…小杉クリニックの現状と課題―七年間の臨床経験から―、アルコール医療研究六・七―一四、一九八九
- (三) 齊藤利和、芦沢 健、白坂知信…アルコール依存外来、臨床精神医学 一九(八)・一二二―一二五、一九九〇
- (四) 東谷慶昭、川勝 忍、他…山形大学医学部付属病院におけるアルコール症治療の現状、臨床精神医学二九(四)・四四五―四五〇、一九九一
- (五) 齊藤 学、高木 敏、小坂憲司、編…アルコール依存症の最新治療、金剛出版
- (六) 齊藤 学…アルコール依存症の精神病理、金剛出版
- (七) 齊藤 学…家族依存症、誠信書房

●わが国におけるカウンセリング・心理療法の発展

——ロジャーズ・C・Rとジェンドリン・E・Tを中心に——

伊 藤 義 美

一、わが国における心理臨床の発展

最近、わが国でも心の問題に悩んで専門的な援助を求める人々が増加し、さまざまな領域において心理臨床への社会的ニーズは高くなるばかりである。これに因應べく、資格制度や教育・訓練などの困難な課題をはらみながらも、ついに『日本臨床心理士資格認定協会』が一九八八年（昭和六十三年）三月八日に発足し、一九九〇年（平成二年）八月一日には文部省から財団法人として許可を得ることになった。こうして現在（一九九一年二月）では「心の専門家」としての臨床心理士の資格を取得したものは三、〇〇五名に達し、『日本心理臨床学会』の会員数も四、五〇〇名を超えるに到っている。すでにその会員数は、『日本心理学会』のそれに次ぐものになっているが、資格取得者や会員数は今後増える一方であろう。しかしわが国の臨床心理学の歩みを振り返るとき、かならずしも

樂觀視できるものでは決していない。村瀬（一九八五）は、戦後の日本の臨床心理学の歴史を四つの時期に分けて考察している。

一、黎明期（輸入と試行の時代） 一九五〇年代（昭和二十五年以降）～一九六三年（昭和三十八年）

二、高揚期もしくは幻の定着期 一九六四年（昭和三十九年）～

一九六八年（昭和四十三年）

三、混乱期 一九六九年（昭和四十四年）～一九七三年（昭和四十八年）

四、模索期―事例研究運動の時代 一九七四年（昭和四十九年）～一九八五年現在（昭和六〇年）

以上の四期である。この四の模索期はまだ続いているのであろうか。わが国固有の特徴ともいえる事例研究運動は、現在でもなお衰えてはいないが、事例の研究や公表には以前よりも慎重になってきている。心理臨床学会大会レベルでも一時期の事例研究一辺倒から徐々に見直されてきている。一方では、資格認定協会の設立、財団

法人化への動きが活発化、具体化してついに実現するに到り、第二の高揚期ともいえる様相を呈している。四の模索期を終え、一九九〇年になって新たな時期、段階に入ったことは確かな事実である。しかしこれがひとまずの形式的、制度的な確立へのステップにとど

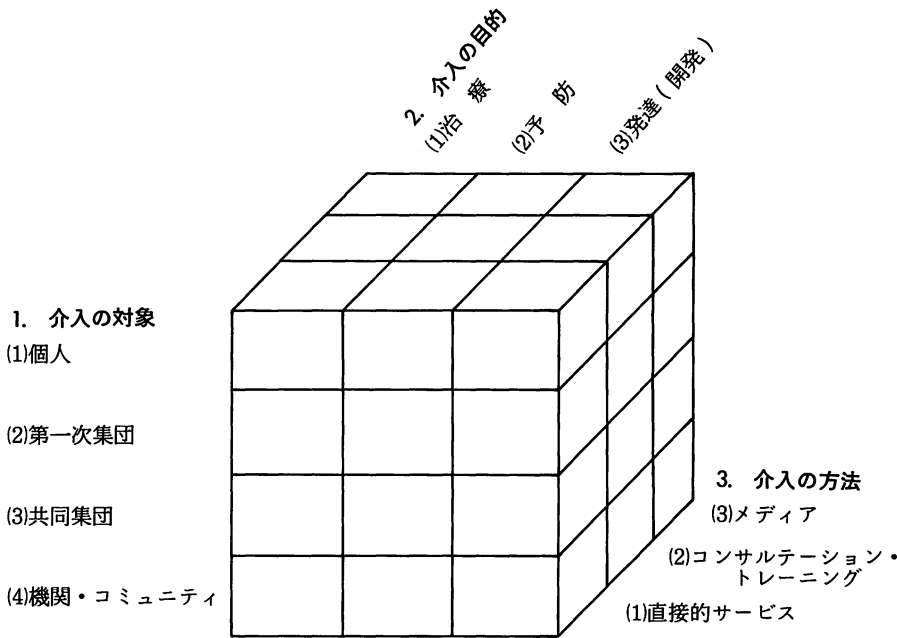


図1 カウンセリング的介入の立方体モデル (Morris, W.H. ほか, 1974)

まらず、実質的な確立期や発展期となっていくか、それを再び幻の確立期に終わるかは、重大な関心をもって今後の推移を見守るしかない。

臨床心理学のなかで、とりわけカウンセリング・心理療法において心理臨床家(臨床心理士)の援助活動も治療を目的として、個人(クライアント、来談者、患者)に対して、直接的に行う伝統的モデルのみでは対処できなくなってきた。パースンの発達・開発あるいは創造が、また環境への積極的な介入がいっそう求められるようになってきている。例えば、カウンセリング的介入の立方体モデル(cube model) (Morris, W.H.ら、一九七四)が、心理臨床家の援助活動の多様な拡がりを考える際に参考になるであろう。この組織的、統合的モデル(図1)では、介入が対象(個人、第一次集団、共同集団、機関またはコミュニティ)、目的(治療、予防、発達、及び方法(直接的サービス、コンサルテーションとトレーニング、メディア)で構成されており、種々のカウンセリング活動の記述・分類を可能にしている。

二、わが国におけるロジャーズ

今日、わが国のカウンセリング・心理治療の世界は来談者中心療法、精神分析学派、ユング派、行動療法、ゲシュタルト療法、論理療法、内観法、家族療法、集団心理療法、折衷派など多様な立場がみられる。

しかし歴史的にみると、日本のカウンセリング・心理治療は、戦後とくに一九五〇年代の中頃からロジャーズRogers, C.R.(一九〇二—一九八七)の理論(人間哲学を含む)と方法をよりどころに発展してきたといえる。ちなみにロジャーズの『Counseling and Psychotherapy』(一九四二)が一九五一年(昭和二十六年)に『臨

床心理学』という書名で友田不二男によって翻訳、刊行されている。一九五五年（昭和三十〇年）八月には、ロジャーズの立場からのカウンセリング研究集会（ワークショップ）の第一回目が友田や佐治守夫らが中心になって茨城キリスト教短期大学で開かれている。また、一九五六年（昭和三十一年）に友田の『カウンセリングの技術』が出版され、一九五七年（昭和三十二年）に『ロージャーズ選書』全五巻が完結している。この選書は、のちに『ロージャーズ全集』全二三巻（一九六六、一九六七、一九六八、一九七二）に発展していくことになる。ファックス、P・J・遠藤 勉著『カウンセリングと問題の少年』が一九五八年（昭和三十三年）に出て、伊東 博の『新訂・カウンセリング』（一九六六）の初版となる『カウンセリング入門』が一九五九年（昭和三十四年）に出版されている。これらは、いずれもロジャーズの立場に立ったものであり、ロジャーズは教育界や産業界に急速に広まっていったのである。そして一九六一年（昭和三十六年）にロジャーズが来日したことによってその影響力は絶大なものとなった。こうして一九六〇年代までにロジャーズの理論と方法は、一種のカウンセリング運動、ロジャーズ現象あるいはロジャーズ神話ともいえるほど爆発的にわが国に普及し、定着していく様相を呈していた。

ロジャーズがわが国に熱烈に受け入れられた理由として村山（一九八七）は、次の三点をあげている。

- ① 終戦後、日本の復興が始まり、われわれ日本人が米国の文化、民主主義を新鮮な感じで追い求め、新しい心の支えとしようとしていたこと。
- ② ロジャーズのカウンセリング理論は、複雑な理論を必要とせず、カウンセリングの実際の方法を提供したこと、つまり安全で着実なカウンセリングの「How to」を提供したのである。
- ③ ロジャーズの人間論が人間の成長力を信じ、共感、自己実現、

受容といった、相手との人間のかかわりを通じてその成長力を解放するといった民主主義的で革命的なもの、しかも禅、老子などとの共通性を持つなど、きわめて東洋的なものがあって、当時の日本人にフィットしたのである。カウンセリングの一技法というよりは、「人生の道」「生きる道」として受け止められたので、心理学者よりは一般大衆、哲学、教育学、宗教などの諸分野の人々が非常な関心を示したのである。

一九七〇年に、それまでのカウンセリング・ワークショップと異なるエンカウンター・グループが、島瀬 稔によって導入され、それ以後、今日まで『人間関係研究会』は毎年、エンカウンター・グループのプログラムを提供してきている（島瀬、一九九一）。また、『教育と医学』（第一八巻一号、一九七〇年）において「特集・来談者中心療法」（文獻欄の図参照）が組まれているが、このなかには、それまで絶対視さえされていたロジャーズの批判や見直しが出現している。こうして一九七〇年代及び一九八〇年代になると、ロジャーズ一色を脱し、ロジャーズを基礎に他の立場が取り入れられたり、新しい立場も幾つか台頭してくるようになった。わが国のカウンセリング・心理治療そのものが多様化、専門化していくようになってきたのである。ロジャーズ自身は、非指示的カウンセリング、来談者中心療法、（体験過程療法）、（エンカウンター・グループ）、パーソン・センタード・アプローチ（PCA）へと、絶えず発展している（図2参照）。しかし、わが国にはかならずしもこのロジャーズの変化や全体像が正確に伝わったというわけではなく、例えば村瀬（一九八五）は、ロジャーズがアメリカでの背景や文脈と切り離されたかたちでわが国に部分的、表面的に輸入されたことを指摘している。とにかくロジャーズは他の学派への影響をも含めて、わが国のカウンセリング・心理療法の発展に多大の影響を与えてきていると考えられる。

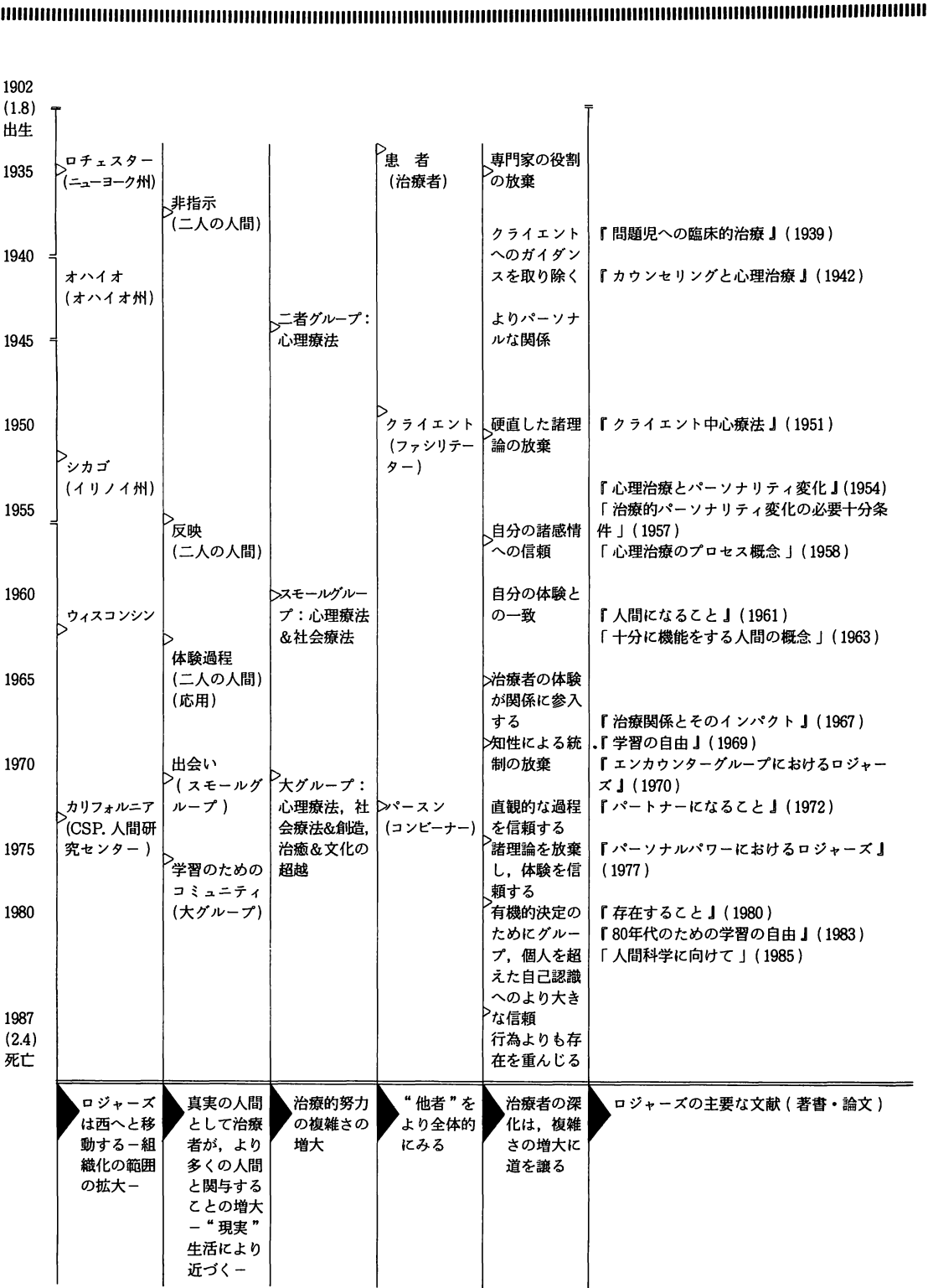


図2 パースン・センタード・アプローチ (PCA) の発展 (Wood, J. K., 1982 に加筆・改変)

ロジャーズは、一九八三年に『人間関係研究会』の尽力によって長女のナタリー・ロジャーズ Natalie Rogers とともに再来日して、『パースン・センタード・アプローチ・ワークシヨップ』（四月三十日～五月五日）を開いている。そのときに、「来談者中心療法が日本においてどのように受け入れられ、どのように展開しているのか、知りたい」と参加者に問いかけていた。

そのロジャーズは一九八七年二月四日に亡くなったが、この年の日本心理臨床学会第六回大会（於、名古屋大学）において大会企画シンポジウム『心理療法の今日的課題を問うーC. R. ロジャーズが遺したものからの出発』（企画：村上英治・田畑 治・伊藤義美、十一月二十四日）が行われた。そして来談者中心療法の誕生（一九四〇年十二月十一日、ミネソタ大学での講演『心理療法における新しい概念』）から半世紀たった一九九〇年には、日本心理臨床学会第九回大会（於、東京大学・大正大学）で自主シンポジウム『わが国のクライエント／パースン・センタード・アプローチ及び体験過程療法の現状と課題をめぐって』（企画：田畑 治・伊藤義美、九月二十三日）がもたれた。これらの動きは、わが国においてロジャーズがどのように取り入れられてきたか、その意義や評価を確認しようとするものである。

三、わが国におけるジェンドリン

さて、ジェンドリン Gendlin, E. F.（一九二六―）であるが、ジェンドリンはかなり早い時期からロジャーズの後継者と目されていた。ロジャーズが一九六一年（昭和三十六年）に初来日したとき、ロジャーズの口からしばしばジェンドリンの名前がきかれたといわれている。わが国にジェンドリンが体験過程の理論とともに紹介されたのは、一九六六年にジェンドリンの論文集『体験過程と心理療

法』（一九六六）が村瀬孝雄によって訳出されたことによる。さらに藤原・村山（一九七五、一九七六）によって体験過程と焦点づけ（フォーカシング）の理論と方法についての紹介がなされている。

そのジェンドリンが一九七八年十月に村山正治の尽力と『日本心理学会』の招待で来日し、日本心理学会第四二回大会（於、九州大学）で特別講演を行い、福岡、京都、東京で講演やワークシヨップを行った。この希望の来日は、それまで文献のみでしか知りえなかった数多くの心理臨床家や研究者にとって、ジェンドリンとフォーカシングに直接触れることができるまさに絶好の機会となった。これを契機にフォーカシングの理論と実践への関心が急速に高まり、やがて学習会、研究会、臨床実践、ワークシヨップが行われるようになった。たとえば、筆者は西園寺二郎、田畑 治とカウンセリング過程におけるフォーカシングの臨床的適用例（主として神経症、他にうつ病）を検討する研究会に参加した（一九七八―一九七九年）。また、『人間関係研究会』のプログラムでは「フォーカシングの体験とグループでの交流」（増田 實企画、一九七九年より現在）と「フォーカシング・セミナー」（日本フォーカシング研究会主催、一九八二年より現在）の二つのプログラムが、毎年フォーカシングの体験学習の場を提供してきている。

村山・都留・村瀬（一九八二）が、ジェンドリンの著書『フォーカシング』（原題：『FOCUSING』、一九七八、一九八一）を訳出し、同じ一九八二年に日本におけるフォーカシング研究・実践の発展と推進、仲間の交流をめざして『フォーカシング研究会』（事務局：九大・村山研究室内）ができ、『フォーカシング・フォーラム』なる機関紙が年二回発行されている。村山ら（一九八四）は、自分たちの実践と研究をまとめて、『フォーカシングの理論と実際』を出版しているが、そのなかでフォーカシングの今後の展望においてフォーカシングの四つの実践的形態を考えている。すなわち、(1)自

己理解のための技法体系としてのフォーカシング、これには、セルフヘルプのための技法、セラピストの共感訓練、教育への適用の三つが含まれている。(2)体験過程の推進を目標にしたセラピー、(3)フェルトセンスの臨床的取り扱いをねらったセラピー、(4)エンカウンター・グループの個人過程の促進、である。

ジェンドリン夫妻が、一九八七年九月に『日本フォーカシング研究会』の招きで再度来日し、『フォーカシングセミナー』でフォーカシングによる夢解釈の新しい方法を伝えてくれたことは特筆すべきことである。その翌年に村山（一九八八）が、ジェンドリン著『夢とフォーカシング—からだによる夢解釈—』（原題：『LEFT YOUR BODY INTERPRET YOUR DREAMS』一九八六）を訳出している。これには夢解釈のための一六の質問の使い方、バイアスコントロール、生きているからだと夢の理論、などの興味深い展開が含まれている。そして一九九〇年に日本心理学会第五回大会（於、東京都立大学）において自主シンポジウム『わが国におけるフォーカシングの現状と発展』（企画：伊藤義美、六月一日）がもたれた。筆者は、一九九一年三月にAn Integrative Workshop for Psychotherapists : Focusing in the Interactional Space（三月四日—七日、於Chicago, IL）とThe Third Annual International Meeting of Focusing Coordinators, Trainers and Trainers-in-Training（三月七日—十一日、於Glenview, IL）に出席した。そこでは、フォーカシングの新しい展開と、あらゆるカウンセリング・心理治療やワークの基礎過程としてのフォーカシングの可能性の大きさを改めて確認することができた。一九九一年七月には、ジェンドリンの来日時のセミナーを含めた村山編『フォーカシングセミナー—夢のデモンストレーションとQ&A—』が刊行される予定である。

*

四、わが国における来談者中心療法及び体験過程療法の現状

来談者中心療法の最初の国際会議である『国際パースン・センタード・アプローチ・フォーラム』が一九八二年七月に開かれ、以後二、三年毎に開催されている。この会議は、参加者もアメリカが中心で、ワークショップ体験（コミュニケーション・ティミティンク、インタレストグループ、小グループ）を中心に運営されているという。しかし一九八八年にベルギーのルーヴァン・カソリック大学で開催された『第一回来談者中心療法及び体験過程療法国際会議』（九月十二日—十六日）は、心理療法のためのアカデミックな国際学会であり個人心理療法の発表が中心であった（村山、一九八八、Lietaer ほか、一九九〇）。

Cain, D（一九八九）は、この国際会議の報告を行うなかで次の五つの動向をあげている。

- ① 治療過程の理解を進め、洗練され、注意深い研究によってもっと適切で効果的な治療者反応を特定化しようとする。
- ② 来談者中心的態度と反応が、すべての来談者にとって必要であるが十分ではないことを明らかにする。したがって来談者中心療法の実践に有用な技法を付け加えようとする。
- ③ 来談者中心の態度条件と体験（過程療法）的フォーカシングとをブレンドするか、統合しようとする。
- ④ 伝統的な純粋な来談者中心派であり、治療者が提供する条件、来談者の内的準拠の維持及び治療者の非指示性の一次性（Primary）を強く主張する。
- ⑤ 他の学派（例えば、フロイド派、アドラー派、ユング派、認知派）の概念と技法を借りてきて来談者中心療法とブレンドする。

これらは来談者中心療法の枠組みにおける国際的な幾つかの動向とか強調を表しているといえるが、ここで国際的といっても主に

ヨーロッパが中心であることに注意を要する。わが国の来談者中心療法及び体験過程療法の枠組みにおいても、研究というよりも臨床実践活動の点ではだいたい似たような傾向なり様相を呈していると考えられる。しかしわが国の来談者中心療法では個人心理療法よりもエンカウンター・グループ（パースン・セントード・グループ・アプローチ）の実践・研究が盛んであり、体験過程療法ではフォーカシングの実践・研究が盛んになってきているところに特徴がみられる。

ちなみに、わが国での一九八三年のワークショップではロジャーズの口からジェンドリンの名前がきかれることはなかった。ウィスコンシン・プロジェクトのあとジェンドリンはロジャーズから離れており、ロジャーズはこのプロジェクトのあとエンカウンター・グループに本格的に取り組み、やがて組織の変革、地域的文化葛藤の解決、国際的紛争の解決といったエンカウンター・グループの社会的適用へと向かっていくことになる。そしてノーベル平和賞（一九八六年度）にノミネートされるまでになる。一方、ジェンドリンは、一九八七年の来日時にも「私はグループを好まない」と語っていた。また、ロジャーズが亡くなったあとジェンドリンは、ロジャーズの後継者としての役割を担わされることには慎重に構え、距離をとっているようである。

文 献

- Cain, D. J. 1989 A report on the interactional conference on client-centered and experiential psychotherapy. *Person-Centered Review* 4 (1), 3-9.
- Gendlin, E. T. 1981 *Focusing* (2nd ed.) Bantam Books, Inc., New York. (村山正治・都留春夫・村瀬孝雄訳 一九八二『フォー

カシング』福村出版)。

Gendlin, E. T. 1986 *Let your body interpret your dreams*. Chiron Publications, Wilmette, Illinois. (村山正治訳 一九八八『夢とフォーカシング』福村出版)

皇瀬 稔 一九九〇『エンカウンター・グループと心理的成長』創元社。

皇瀬 稔 一九九一 人間関係研究会二十年の歩みと課題『ENCOUNTER 出会いの広場』(人間関係研究会二十周年記念・特集号) 一二、六一六。

皇瀬直子・木村 易 一九八九 エンカウンター・グループ 伊藤隆二編『心理治療法ハンドブック』福村出版 一八二二〇六。

皇瀬直子ほか編 一九八五『カール・ロジャーズとともに——カール・ナタリー・ロジャーズ来日ワークショップの記録——』創元社。

伊東 博 一九六六『新訂・カウゼンシング』誠信書房。

伊藤義美(企画責任者及び指定討論者)・村山正治(司会者)・池見陽(話題提供者)・田村隆一(話題提供者)・白岩紘子(話題提供者)・阿世賀治一郎(話題提供者)・木村 易(指定討論者) 一九九〇 わが国におけるフォーカシングの現状と発展 日本心理学会第五回大会発表論文集(三七)。

伊藤義美 一九九一 教育フォーカシングとその試行について 名古屋大学教養部紀要B 三五、二九一四七。

Lietser, G., Rombauts, J. and Van Balen, R. (Eds.) 1990 *Client-centered and experiential psychotherapy in the nineties*. Leuven University Press, Belgium.

村瀬孝雄 一九八五 日本の臨床心理学——その三十年間の歩みからまなぶもの 内山喜久雄ほか編『心理臨床家と精神療法』金剛出版 五七—七四。

村瀬孝雄 一九八九 フォーカシング 伊藤隆二編『心理治療法ハンド

ブック』 福村出版 一三七―一五四。

村瀬孝雄・野村東助・山本和郎編 一九八四 『心理臨床の探究―ロジャーズからの出立』 有斐閣選書。

村山正治編 一九七七 『エンカウンター・グループ』(講座 心理療法七) 福村出版。

村山正治 一九八七 カウンセリングの展望 『教育と医学』 三五(三)、四―一二。

村山正治ほか 一九八四 『フォーカシングの理論と実際』 福村出版。

Rogers, C. R. 1942 Counseling and psychotherapy: New concepts in practice. Houghton Mifflin (佐治守夫編、友田不二男訳 一九六六 『カウンセリング』 ロジャーズ全集第二巻(原著の第四部「ハーバート・ブライアンのケース」のみ同全集の第九巻所収) 岩崎学術出版社)

Rogers, C. R. 1951 Client-centered therapy: Its current practices, implications, and theory, Houghton Mifflin. (友田不二男編訳 一九六六 『サイコセラピー』 ロジャーズ全集第三巻(原著の第一部のみ。他は同全集の第五、七、八、一六巻に分訳所収) 岩崎学術出版社)

Rogers, C. R. 1970 Carl Rogers on encounter groups. Harper & Row. (畠瀬 稔・直子訳 一九八二 『エンカウンター・グループ―人間信頼の原点―』 創元社)

Rogers, C. R. 1977 Carl Rogers on personal power: Inner strength and its revolutionary impact. Delacorte Press. (畠瀬 稔・直子訳 一九八〇 『人間の潜在力』 創元社)

Rogers, C. R. 1980 A way of being. Houghton Mifflin Co. (畠瀬直子監訳 一九八四 『人間尊重の心理学』 創元社)

佐治守夫 一九八八 『カウンセリング』 日本放送出版協会。

佐治守夫・飯長喜一郎編 一九八三 『ロジャーズ クライエント中心療

法』 有斐閣新書。

佐治守夫・石郷岡泰・上里一郎編 一九七七 『グループ・アプローチ』 誠信書房。

佐治守夫・村上英治・福井康之編 一九八一 『グループ・アプローチの展開』 誠信書房。

田畑 治・村山正治編 一九七七 『来談者中心療法』(講座心理療法一) 福村出版。

友田不二男 一九五六 『カウンセリングの技術』 誠信書房。

都留春夫 一九八七 『「出会い」の心理学』 講談社(現代新書)。

教育と医学(第十八巻)

◇特集・来談者中心療法◇

〔巻頭言〕 非指示療法と行動療法	牛島 義 友(二)
ロジャーズの発展	伊 東 博(三)
日本における心理療法の発展とロジャーズ理論の意義	河 合 隼 雄(二)
心理療法におけるロジャーズ派の位置づけ	水 島 恵 一(七)
私の治療経験から	佐 治 守 夫(四)
エンカウンター・グループについて	畠 瀬 稔(三)
ロジャーズ理論の本質	氏 原 寛(三)
カウンセラーあるいはサイコセラピストの訓練に伴う問題点	村 瀬 孝 雄(四)
ロジャーズとの出会いと私の歩み	友 田 不 二 男(五)
クライエント中心療法の創始者カール・ロジャーズの人物像	村 山 正 治(六)
精神科医からロジャーズを見る	加 藤 正 明(六)
先人のことばと体験	拓 植 明 子(七)

図3 「特集・来談者中心療法」の主要目次

大学生とグループ体験学習

～自己体験に依拠して～

池内 香

一、学生がグループ体験に出たがらない理由

私が、初めてニュー・カウンセリングとよばれるグループに参加したのは、大学三年の九月である。その後、現在に至るまで宿泊形式のグループに四回参加している。その他に何度か月一回の継続型のグループ参加したこともある。

とは言っても、元々グループに関心があったわけではない。私は、大学に入るに際してとりたてて疑問を感じることはなかったし、また今日の学歴社会に自分を合わせている、ということにさえ気づかずにいた。大学に入っても、慣れ親しんだ高校時代までの生活スタイルに固執し、講義、アルバイト、サークルで予定を埋めつくし、それをこなすために忙しい生活を送ってきた。

友人と同じ行動をとり、先輩を真似ることが、大学生としての条件であるかのように考えていた。虚偽の大学生像を作り、大学生を

演じていたという状態がグループに参加する（もしかしたら、今もそうかもしれないが）までの生活である。

与えられた課題をこなすという受け身的な姿勢、要領良くこなすという技術を身につける高校までの教育システムでの要求に加え、大学入学で得た自由な時間は遊びに、といった生活を送っている学生にとってグループ体験学習は視野に入る余地はない。私自身、大学一年の時、友人にエンカウンター・グループに誘われた時、「そんな真面目に話し合うことのどこがおもしろいのか」と答え、真摯な話し合いに気恥ずかしさ、嫌悪感、恐怖心を抱いたのである。

大学においては能動性、探索的姿勢、自律性、主体的であることを求められているはずだが、この条件に気付いて行動思索している学生がどれくらいいるのであろう。私自身を含めて多くの学生は、サークル、アルバイト、その他遊び志向の活動に従事し、表面的に大学生生活に適応しているだけのように思われる。表面的に適応している学生にとっての人間

関係は、自分と相手とに境界線を引き、必要な交流はできるだけ避けるように、外面と外面とで交流しているのである。互いの内面にはほとんどかわりない交流、例えば情報交換などを主なコミュニケーションとしている。

そのような学生にとって、見知らぬ人と互いに内面的に関わるグループ体験学習、つまり自分たちの好んでとっている人間関係とは正反対のコミュニケーションを強いられるところに、進んで参加しないのもうなづけよう。遊びというには堅くて、真摯で、直接的な利益の見えない、しかも有料のグループ体験学習は自分たちの境界線外の異質、特異なものと思えるのである。

能動性、探索的姿勢、自律性、主体性が内側に向けられたものが、自己探求であろう。四年間の大学生活で本質的な大学生の課題に取り組まなくても、表面的に適応していれば卒業できるし、社会からも認めてもらえる。「大学時代」は、就職して社会人となるまでのひとときの「休息期」としての意味しか持ちえなくなっているのだろうか。

「休息期」としての大学生活は、退屈だとしても居心地のいいものであって、捨て難いことを、私たちは知っている。馴れ親しんでいるが故に、不安定なものであっても「安定感」のあるものである。

自己探求のための時間を持つことは、大学という安心できる組織から取り残され、集団規範からの逸脱者（アウトサイダー）になる恐れがある。巧妙に大学生活にうまく適応することで、自己探求の時間を作らないようにしているのだと思う。

「このままで本当にいいのだろうか」という疑問を漠然と感じることはあっても、自分にとって何が正しいのか、何が真理であるのかを探すことは、暗い闇のどん底まで落ちこんでしまい、二度と這い上がれないのではないかという危険があるので直面したくないのである。大学という枠から離れて、何が行われるのか分からないグループ体験学習に参加する勇気はないのだと私は思う。

以上、グループに参加する前の私の心境を振り返ってみた。では、なぜ私がグループに興味を持ち、参加回数を増やしていったのか述べてみたい。

二、ニュー・カウンセリング・ワークショップの印象

ニュー・カウンセリングワークショップに参加した時の動機は単純なものである。以前授業等で知っていた教官が参加者を募集していること知り、友人と二人で申し込んだのである。学生にとっては安くない参加費ではあったが、何とか捻出できたし、その頃折よく暇

もあったのである。

ワークショップのパンフレットには、「感覚の覚醒、身体の動き方、自己の覚醒、対人関係、表出・表現」といった聞きなれない言葉が並んでいた。今にして思えばその本当の意味はほとんど理解できていなかった。何をするか分からないという不安もあったが、友人と一緒に参加しているという安心感が好奇心に変わり、「遊びに行く」という気持ちでいた。

普通このようなワークショップでは、二十人程度の人が集まって行われる。一般に参加者は、教育関係の人（教師、カウンセラー）、学生、企業の実務職という人間を相手にする立場の人が多いのであるが、この時もそうであった。世話人から、簡単な説明の後、自己紹介が始まった。

円になり、名前だけの自己紹介が一通り終わった後「どんな感じがしましたか」という発問が世話人からあった。その後、数回同じ自己紹介を繰り返して、「先の自己紹介と、どう違いましたか」、「どこから声を出しましたか」、「どんな姿勢で自己紹介していますか」といった発問が行われた。答えなくてもよい。何か話したければ自発的に話せばよいのである。

風変わりな質問に、私のような初めての参加者は、心に湧いてきた感情を、見知らぬ人

の前で緊張しながらも答えていた。私は、世話人の発問が授業の前の教師のわざとらしい行為のように聞こえ、答えを出そうとしなかった。他の参加者が感じたことを述べているのかを聞いて、私はあわてて、何を感じているか心の中を探したがそこにあったのは、「嫌だなあ」という一語であった。「感じる」ときに、全く注意を払っていない私にとって、日常生活でしばしば沸き起こる「嫌だ」という単純な感情を呼び起こさせただけだった。

次いで「皆さん、立ってください」と言われ、これに答えて立つと「どんな感じがしますか」、「どんなふうに立ちましたか」と問われた。これには困惑した。何を感じたかといわれても何も感じないし、いつものように普通に立ったのである。なぜこのような質問をするのか分からず、戸惑うばかりであった。

感覚、感情といった内面的なものは、多人数の集まるフォーマルな場所では、抑えるものだという習慣を私たちは知っている。フォーマルな場所では、常に相手から評価されているという意識が働き、感情を無視してたてまえとしての会話、態度で接するのである。日常生活では疎外されている感情に注目するニュー・カウンセリングの第一印象は、戸惑い、驚きを感じながらも、新鮮なおもしろいものというものだった。

参加者が性別、年齢、職業が様々であるに

もかわらず、同じ行動をとり、同じ体験をしているということが苦笑するところでもあった。参加回数を増やすにしがたって、参加者の属性が多様なほどおもしろいことが分かってきた。それは価値感や生き方の違いを越えて、人間の「生きる」という基盤を探究するニュー・カウンセリングでは、参加者が同等の立場になるからである。

世話人は、職業が教師であるとか、年上であるからといって、一人の人間として最大限に尊重するが、特別扱いしない。いろいろな実習においても、個々人の過去や、所属などに対する偏見を持たずに接しようと心掛けるのである。それは、今、ここに集まっている人たちとの出会いを貴重なものと感じているからであり、ここに集まっている人たちと過ごす時間を大切にしようと感じているからである。

また、人間に貼られたラベルが多様になるほど、そのラベルへの偏見が崩壊する過程も様々になることから、参加者の多様性をおもしろいと感じたのである。

ところで、ニュー・カウンセリングワークショップに参加して、ゆったりとなかで暖かいとか、落ち着くといった感じを受ける人が多いと思う。これも、私が参加回数を増やしていった一つの理由でもある。その要因の一つに、実習を終えるごとに、感想を述べ

合うフィードバックの効果があると思う。

フィードバックでは、世話人は私たちの感想について解釈を与えたり、評価することはない。微笑みながら聞いていただけである。ロジャーズは、受容的な脅威のない関係の上でこそ、人は自己受容の方向へ、すなわち自己現実的な方向へ自らを変革していくことができると言っている。また、人が自己受容的になればなるほど、他者をも受容できると強調している。

世話人の無条件に近いと思えるこの受容的態度が、参加者の自己受容につながり、また、他のメンバーをも受容できるようになり、落ち着いて暖かい雰囲気がかもしだされるのであろう。しかし、世話人が参加者の感想に対して卒直な解釈を与えることもあった。それは、参加者が実習の意味を十分に理解できていなかったり、間違った捉え方をしている場合に起こると思われた。

三、「感じることは自由」

感覚の覚醒の実習に「ものの声を聴く」というのがある。これは、「ものと話をしてみよう、その後で対話を記述しよう」という呼びかけの後、自由に行きたいところに行き、自然と対話するもので、実習のなかでも人気の高いものである。人間と自然との

精神的な交流が、豊かな人間性や精神の成長を教えてくれることを体験するというねらいである。

この実習は、ニュー・カウンセリングのなかでも後半に行われるので、非日常的な世界にいうという気持ちですでに広がっており、私は好奇心を持ってM公園に出かけた。しかし、その日は日曜日で公園は、子どもたちや家族づれで賑わっており、非日常的な体験をしているということが恥ずかしくなった。行楽客の存在が私を日常に引き戻し、非日常的な体験を日常的レベルで見失ってしまうのである。私は他の参加者の様子をつかがいながら、他の参加者と同じ行動をとって、日常世界にも非日常世界にもいない不安定な自分を、この実習に適応することで解消させようとしていた。

このように幾分否定的な感情を持ちながらも、実習そのものは感動的に体験できた。しかし、今、その体験を言葉にして報告することは、とても難しい。その理由の一つは、ものと対話できるなんてバカバカしいと考えている人にとって、どんな言葉を尽くしても、「結局はあたなの心のなかで作った一人芝居でしょ」と思われることが予想できるからである。二つめは、実習を振り返り体験を報告する行為には、理性が必要になる。理性が働くということとは、もはや、その時、その空間

の感情、感覚を純粹に伝えることはできないと思うからである。

私は対話内容を紙に記述しようとペンをとったのだが、体験した感情にぴったり一致した言葉が見つからないことに、もどかしさを感じるとともに不安になった。実習ではコミュニケーションが取れたはずなのに、言葉にしてあらわそうとしたときには、体験したときの対話の表現とは違ったものになったり、あいまいな箇所が多いのである。私は記述しながら、「本当に対話したのだろうか」「こんな言葉をあの小さな花は私にしゃべってくれていたのだろうか」と不安になった。自分さえ、自分の言葉の信憑性を信じることができないうのに、他人に明確に伝えることはできそうにないのである。

それでも、できるだけ忠実な表現で、「私の声を聴く」の体験を報告したい。

私は、M公園でいくつかのものと対話した気がした。私が話しかければ、自然が話してくれた気がした。小さな桃色の花に話しかけられた時には、気持ちがとてもなごみ、優しくなった。「こんな小さな花が、地面に根を張って、一生懸命生きている」ということに気づき、涙が出そうになった。堅い大きな岩と対話をした時は、岩が怒っているような気がした。

一時間ほどの実習が終わって、一緒に参加

していた友人のY子が「何だか分からないけど、自然を前にすると涙がぼろぼろでくる」といった。この言葉を聞いて、私はY子が初めてみせた弱さに、人間らしさを感じうれしくなった。

「気がする」「感じる」といった表現は感情であるが、「気がした」「感じた」と実習を振り返ることは理性である。「本当に小さな桃色の花と対話したのか」と問いかけられると、「した」と断定することはできない。けれども、実習の中で何かを感じていたことは事実である。私は「小さな桃色の花と対話した」という表現で断定するつもりはない。ある人々にとっては、バカバカしいと思われるかもしれないが「花と対話した気がする」という表現は、感情であり、誰も否定できないと思う。

理性を優先する立場にたてば、ものと対話することは、不可能であり、無意味なことであろう。世話人から「気がする」という表現の重要性を示唆されたとき、自分の対話内容の不信感が消えた。「気がする」という表現は、感情なのである。誰も他人の感情を「うそ」であるとか、空想であるとかと批判できないのである。感情は、人間に沸き起こる自由なものであり、どのような感情も間違っているということはないのである。

実習「ものの声を聴く」のねらいは、人間

と自然との精神的な交流が人間性や精神の成長を教えてくれるということである。この観点からみれば、小さな花の生命力に気づいたり、自然の尊さ、偉大さ、人間の非力さを感じ、自然（地球）のなかで生かされているという自明の事実に感動し、素晴らしい体験をした。それにもまして確かな手ごたえとして得たことは、「感じることは自由」というものであった。

今、振り返ってもあの時の対話は、真実かどうか分からない。思考を排除し、感覚することに注意を集中した集団のなかで、陶醉をしていただけたとも感じる。しかし、この実習で日常生活にも通用する「感じることは自由」という意識を知覚できたことは、よかったと思っている。

四、「分からない」ことの大切さ

「ボールを与える、受け取る」という実習の時のことである。この実習は人間関係および自然、環境とのかかわり方に気づく機会を提供するものである。全員が両側に分かれて距離をとって一人ずつ向かい合う。二人で一つのボールを投げて受けとる。だんだんと近づいていって、最後は手渡すようになる。

「どのように投げてても構わない」という助言で、私たちは思い思いに投げていた。世話

人から、穏やかな口調で「相手の人間全体を感じてください」という促しがあった。しばらくして、「人間全体を感じたところに、人間全体を感じた時、ボールを投げてください」と言った。私は、この発問を真剣に受けとめることなく、「人間全体を感じるところは足のつま先」と、ふと思いついた感情に従って、ボールを投げていた。

フィードバックの時、私は感じた通り感想を言った。他の人も楽しんでこの実習をしているだろうと予想していたし、幾人かは同じような感想を述べていた。

ところが、Aさんという人が「人間全体を感じると言われても、どうやったら感じるることができるのか分からない」「ずっと考えていたから、なかなか投げられずにいた。結局投げたのだが、それは考えるのを止めたから」という感想を言ったのである。「分からない」という言葉を少しも気後れせず、堂々と言うAさんの発言は、私にとってショックであり、今でもはっきりと、一言一言を記述できるほど心に残っている。

「分からない」という言葉は日常生活でも使われているが、否定されるか、せいぜい消極的な意志表示でしかない。「分からない」を許容してくれない環境では、自分の意に反して、分かった振りをして適当な答えを見つけている。肯定も否定もできない弱い立場に

陥ったとき、私たちは仕方なく、あいまいさを漂わせつつ「分からない」を使う。日常生活において「分からない」は肯定的に使われることはない。

「分からない」とは人間にとって、素直で正直な感情の一つではないだろうか。もし、「分からない」という感情を受容してくれる関係が作れるとしたら、「分からない」と言った人は自分をひとりの人間として認めてもらえていると感じ、もっと純粋な主体性で、生を創造していくことができるのだと思う。

五、ニュー・カウンセリング・ワークショップの体験を振り返って

ワークショップの中で私は、結果よりも体験のプロセスが大事なのであり、そのプロセスを楽しみ、結果については何も心配しなくてもよいということを感じた。目的や結果よりもその過程、つまりやってみることが大切だということを、身体を使って体験していることとすることにひかれて参加回数を重ねていったのである。

そして、今の時間を大切にしたいという気持が、あるいは、一人一人を人間として尊重しようという雰囲気、メンバー（他人）への信頼となり、自己探求（学習）をメンバーの助けを借りながら勇気をもって実現できるようになっていった。

ニュー・カウンセリングは、「人の住む世界」とはどういうものか、「人と人の間」はどうあればよいのか、という「生きる」ことに不可欠な問題に正面から取り組むものであると思う。「生きる」ことの本質を、互いにいったり合うとか、慰めあうというのではなく、現実目に向けて積極的に「生」を感じ、考え、「生」を創造するものであると思う。

私はこのワークショップに参加して、戸惑いを感じながらも体験学習を身体でやることで、「人間」について、あるいは自己について、頭の中で考えていた狭い像ではなく、ほんの少しだが本質を体得できたように思う。

ただ、人間探求というねらいとは離れて、いろいろな実習を気軽にやれて、「楽しい」、「おもしろい」といった比較的軽いノリで参加回数を増やしていったことも否めない。強迫性の少ない空間で、私は今までに見失っていたものに気づき、安らぎを感じながら、自己（人間）に目を向ける余裕、心のゆとりができていたのだと思う。

自己（人間）探求の場としてグループ体験学習に参加するには、大学生という身分、時期は、私にとっては最適であったように思う。

出会い百選 ⑩

人間研究所ディレクター

スザン・スペクターさん

島瀬直子

春らんまんの桜の下で、遠き地よりはるばるやってきたスペクターさんに出会うという素敵なプレゼントが、天国のロジャーズさんから届いた。

カリフォルニアから飛んできた彼女は、四条河原町をちようちよのように軽やかに歩く。丸山公園のしだれ桜が満開の夜で、通りは人々、人。暗くて見えないけれど、ほこりが舞い上がっているのがわかる。ラ・ホイアの澄んだ空気を思い出し、申し訳なくて身が縮む。「人を見ながら歩くって楽しい。私、ニューヨーク育ちだから。ラ・ホイアは、こういう光景ないから、嬉しい。」ほっとして、私の心も浮かれ出した。

夜の桜は神秘的なたたずまいで、眺める人を異次元の世界へ連れ去りそう。日本に初めていらっしまったそうだが、日本との最高の出会い。西洋の人々が夢見る出会いである。

スペクターさんは、ロジャーズさんの出身大学コロンビア大学で修士号を取ったサイコロジスト。今はディレクターとして、人間研究所を守っておられる人である。

修士号を取った彼女が働き始めたのは、モンテッソリー教育システムの教材を扱う会社だった。ここで働いていた時、教材を売るだ

けでなくモンテッソリー学校を設立してアメリカの人々に実際を見てもらうのがいいと考えた。時はアメリカが最も繁栄を誇った六十年代のことで、資金を提供してくれる人が現れ、学校を設立してスペクターさんは校長を勤めることになった。十五年間、スペクターさんは、幼稚園から高校まである私立学校の校長先生をした。この時に、ロジャーズの考え方に会ったわけである。モンテッソリー教材を使いパーソンセンタードの理論で運営されたこの学校からはユニークな人材が育ったという。彼女は三人の娘をここで育てている。二人はとても進歩的、一人は保守的とのこと。

その後、カリフォルニアへ。ひとつの仕事に自らを縛らないところが、やはりアメリカ的だ。こうして晩年のロジャーズさんと一緒に仕事するようになった。

アメリカも高学歴社会が行き着く所まで行き、修士号では十分とは言えなくなったようだ。そこで博士号取得を考え始めた。スペクターさんに、保守的権威的システムが合う筈がない。そこはアメリカ。しかるべき大学で修士を取った人達が働きながら博士号をとれる大学院大学がある。それも、学生は世界中にいると言う。日本で教えつつ研究している



イギリス人もいるそうだ。今回スペクターさんが日本に来たのは、日本に出かけてそこで実際に授業を受けるコースを選択したためなのだ。そういえば、京都にはスタンフォード大学の分校(?)ができています。三カ月のコースで、多くの学生が京都で学んでいる。世界は、いよいよ机上の研究から離れる方向へと向かうのだろうか。

それにしても、孫のいる年齢の人が今から博士号を取るのだ。論文だけで取るのではなく、実際に学生体験もやりながら。そのファイト、たくましさ、エネルギー、彼女といふとそういうものが直接伝わってくる。その昔、バックボーンという言葉がはやっていたが、スペクターさんには本当に骨の太さを感じさせられた。

翌日、日本人間性心理学会関西西部会主催で囲む会を開いた。

クライエント・センタード・セラピーの進化

来談者中心療法は進化したというのは彼女の表現である。その中心はセラピストの積極的参加にあると彼女は考えている。人間に内

在する自己決定や成長力を開花させる基本哲学に変わりはない。可能性が共感や真実性、受容によって実現していくことも変わりはない。ただ、セラピストよりも内発的自己成長に明確に重点が置かれている。クライエント自身への信頼が、来談者中心療法五十年の歴史の中でより高まり、揺るぎないものとなってきたのだろうか。カウンセラーは、のびのびと自分を表現しながら参加するようになっているとスペクターさんは指摘する。

共感といい、真実さと言っても、それが本物でなければ役立たないというのだ。感情の反射が『ホンネ』でなければならぬ。スペクターさんは、日本に来るために色々読まれたようで、「honne」と言われた。誰もそれを日本語と思わず、なかなかほほえましい光景が展開した。

この進化は、グループに負う所が大きいと指摘する。内的可能性が、グループ内の対決や、様々な交流によって育つ部分が大きいと言うのだ。本当に相手を理解した上で語りかけた内容が真に相手の成長にプラスすると。ただ、ファシリテーターは場を取り切ってしまうことがないよう細心の配慮が必要である。スペクターさんの話を聞いていると、「精進」という言葉が浮かんでくる。セラピスト

が積極的に語るということを繊細な配慮なしに受け取ったら、また非指示的という所からやり直さねばならないような状況が出現する恐れだってある。私達には限りなく精進せねばならない課題があると言える。

女性には成長を促進する豊かな可能性が内在している

女性にそなわる成長促進的能力の高さは、フロイド、ピアジェ、エリクソン達の理論を引用するまでもなく、女性が生きる現実を見つめれば明確に指摘されるとスペクターさんうん。なるほど。日本女子大学で学会があった時、大学に敬意を払って臨床家としての女性の特性を研究したことがあるのだが、関心をもってくれる人がきわめて少なく、がっかりして、以来女性を見つめることをやめていたが、アメリカ女性達は様々な角度から研究をしてきたようだ。

「出会いの広場」を読まれる日本男児諸君。なにとぞアレルギーを起こさず、こういうことをスパスパ語る女性諸君となかよくしよう。未来はみなさんのものですぞ。先日あるサイコロジストに会ったら、「いやな時代になり

ました。男は生きにくいですよ」と嘆息をもらしていた。「あー、この人二十一世紀には、もうついていけないだろうな」

次の世代を生むという性役割に縛られて生きてきた何十万年のあいだにはぐくまれた特性は、男性と手を携えて歩む中で真価を発揮できるだろう。それを男が大きい顔できないと嘆くのはあまりに視野狭窄というものだ。

西洋における我々概念の貴重さ

いま、文化人類学者の活動がめざましい。彼らは本当に地球をまるごと捉えようとしている。日本に威勢よく乗り込んでくるヒルズ女史などを眺めていると、「NOと言おう」という我らが慎ちゃんなどを眺めていると、また戦うのかなと肝がひえてくる。でも、人類学者の取組をみているとちょっとは希望が感じられる。もちろん、一番希望がもてるのは、出会いの広場の読者がいることなだけだ。

スペクターさんは、シュウエーダー氏が、文化を自我中心型から社会中心型にまたがる広い視野で見ていると指摘する。アメリカの

男はもっとも激しい自我中心型だという。そこには我々という概念がいりこむ隙がない。フェミニスト達が苦しんできたのは、我々という概念で仲間として迎えてもらえなかったからなのかしら。

スペクターさんは、我々概念で関係を見たいそうだ。「いま痛んでいるあなたと共にいることを、嬉しく思います。」と。ロジャーズさんは我々概念で表現していないけれど、彼女は無条件の受容や共感に我々概念を感じるのだそう。そこに世界の人々とながつていける方法論を見いだせると。

ヒューマニスティック心理学の重要性

アメリカは大変な経済危機で人間性心理学も、ちょっとおかげさだが絶滅の危機にさらされているという。でも、この人ちっとも動じていない。横で通訳していて、「こんな骨の太い女性が、存在するんだー」とただただ舌をまいた。これじゃ、男の美学をふりまわす夫に嫌気がさして、とっとと離婚しちゃう人が続出するわけだー。

ヒューマニスティック心理学の最も重要な

貢献は、「直観」を学問の世界に取り組んだことだと彼女は考えておられる。彼女は敬愛するカールの論分で締めくくった。

『ファシリテーターとしてでもセラピストとしてでも、自分が一番よく動いている時、ある特性を認める。内的な直観的自己、自分の知らなかった自分、意識の日常性を越えた所、そんなものが動いて治癒が展開する。私がいることが、それだけで援助的に作用する。自分の力でどうこうできるものではなく、リラックスして自分の核に触れてるだけで、自分を駆り立てるままに従って。論理だてることはできないし、考えてやれるものでもない。けれども、自分でも変に思うそれが、なにか的をえている。そんな時、自分の魂がもうひとりの魂と触れたのだ。我々の関係が関係にとどまらず、より大きなものへとつながっていく。そこでは、深い次元での成長、治癒、エネルギーが実現している。』

ドンキホーテーおばさんの挑戦

一九九二年、ラ・ホイアで三週間の国際ワークショップを開く。次の年は、レニングラ

ード。これはスペクターさん達の立案したプログラムである。日本流に言うなら、ロジャーズさんの追悼記念だ。ヒューマニスティック心理学の実践とも言える。さすが、二十代で学校を設立した人だ。このおばさんが研究所のディレクターに選ばれたのがうなずける。カリフォルニア大学サンタバーバラ校が後援するようで、こういう経験から博士論文なども生まれるようだ。

びわこ・ワークショップで生まれた「カタクリの会」の女性達が行きたいと、貯金しはじめたみたい。あなたも、いかが？一緒に地球人として生まれ変わる試みにぶつかりませんか？

私は、この骨太おばさんに密着してカルシウムを分けてもらいたいと考えている。

いやー、地球は面白くなってきた。いよいよ二十一世紀だ。

はたせ なおこ
●滋賀大学保健管理センター

森
の
中

坂野剛崇



森の中はすべてが自然
風に揺れる木の葉に無理はない
せせらぎはせせらぎの音を真摯に表現する
そこには澄み切った調和がある

手にすくう透明な水の確かな存在感

樹肌のあたたかさ

岩の固さ 冷たさ

土の柔らかさ

水の透明さ

さしこむ木洩れ日の明るさ

腕に触れる涼しくも冷たい空気の流れ

心の鎧を外したとき

私も自然の一部となる。

私が溶けてなくなりそうな不安と

迎え入れられる喜び

やがてはそれも忘れ

森の中に溶け込んでいく

私も自然の一部となる

90年清里プログラムに参加して

— 10年ぶりの参加 —

高松 里

清里まで

清里プログラムに参加したのは、ちょうど十年前の一九八〇年。その後、ファシリテーターとしてグループに加わることは多かったけれど、メンバーとしての参加は実に十年ぶりとなった。

この十年は、私の二十代の大半を占めるからやはり重要な十年と言って良いだろう。二十一歳の時、札幌の手稲山（ていねやま）というところでエンカウンター・グループというものに初めて出た。北大の三年生の時である。幸せな体験だった。その後何年もその時のことを思い出し、そのたびに暖かい気持ちになった。

そのグループに、精神科でカウンセラーをしている女性がいた。自分もなれるものなら

カウンセラーになりたいと思った。そして、卒業とともに北海道を離れ、神戸の甲南大学の先生のもとで、カウンセリングとグループの勉強を始めた。清里プログラムに出たのは、その年の夏のことである。

そういうわけで、その年は大変な年だった。ブータローをやったことのある人にはわかるだろうけれど、何でもできそうな高揚した気分と、自分はこのままダメになっていくんじゃないかという不安が同居していた。解放感と孤独感。

なぜか今年、また清里プログラムに出てみたくなった。数えてみたら十年ぶりである。カウンセラーとしてのキャリアが出来たという意味ではあの頃とは随分変わってきた。しかし、人との関係においては何が変わり、何が変わらないのか。

十年前、「自分はこの世の中で、居ても居なくても良い存在だ」としみじみ思った。セ

ッションを抜け出して、一人でホールの床にねころがって、そう思った。

多分、またあの床にねころがってみたいと思ったのだろう。時間を遡る、なんて少しシヤレてみせて、九州から大型バイクで出かけることにしたのだった。

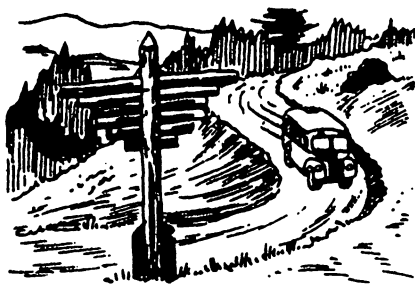
清里まで約千キロ。真夏の高速道路をとにかく走り続け、諏訪湖・ビーナスライン・志賀高原・長野市を巡り、四日目になつかしい清泉寮に無事到着した。

清里で

「自分は遠くからやってきた」と、セッション中何度も感じた。飛行機で飛べば一日で着けるのに、バイクで行ったことも手伝って、気持ちとしては本当に遠いところだった。

コミュニティセッションが行われたホールは、昔よりずっと狭く感じたけれども、確かに同じ場所に戻ってきたという実感はあった。小グループは随分おだやかで、ゆっくり話してみたり、沈黙を楽しんだりしていた。休み時間には卓球をしたり、ピアノを弾いたりして楽しむことができた。夜も気に入った人と飲みながら遅くまで話した。

自由時間には、清里で転倒して壊したバイ



クの修理をしに下の町まで行ってきた。北海道からバイクで来たという人のヘルメットを借りて、グルーブの女性を後ろに乗せ、近くの山を走り、ペンションでお茶を飲んだ。

このように、人との距離を測りつつ、侵入したり侵入されたりしないようにしながら、自分の足元を見つめることに大方の時間を使っていた。そして、人とそれほど近づこうとしない自分を改めて気づいて、嬉しかった。

十年前と最も変わったところは、どこにいても「一人でも良い」と思えるようになったことだろう。寂しさから人に近づき、人を利用することをしないで済む。それはとても素晴らしいことに思えた。

このような時間を与えてもらったことに、非常に感謝しているし、随分気持ちが悪された。「自分らしい」というのは多分こういう状態を言うのだろう。十年という時間は長いけれど、その間に一人で立つことができるようになったのを確認できて、本当に嬉しい。

清里から

最終日の朝、台風がすぐ近くを通過し、交通が寸断され、大騒ぎになった。玄関先で興

奮して人々が情報交換しているのをワクワクしながら見ていた。

最後のコミュニケーションも終わり、雨の中をバスや車で帰り始める人たちをずっと見送った。握手をして抱きしめて、またどこかで会おうと声をかけて、手を振った。そして、あるメンバーと下の美術館を見てから清里を離れるつもりでいたのだけど、台風のためキャンセルが出て諏訪湖にホテルがとれた。急遽そちらに向かうことになり、もう少し旅行は続くことになった。

帰ってきてから、写真を送ったり送られたり、手紙のやりとりがあった。電話も時々来る。福岡動物園へカバを見に行く、とセッシヨン中言ったのだけどそれはまだ実現していない。プーターローの××君と○○君はどうしているだろう、などと時々思い出すけれど、多分皆元気にしているのだろうと思うことにしている。一緒に旅行を続けたメンバーとはずっと連絡を取り合っている。

また、十年後に清里に行くので、それまで清里プログラムが続いていることを祈っている。十年後は西暦二千年！。

(一九九〇年十二月)

たかまつ さとし

●九州大学留学生教育センター

清里 1990年8月

門田路子

IMPRESSION・印象

私がそこにいて、そこにいる人たちと、そこにある自然の中で、満ち足りた思いで過ごした日々でした。

清里……それは、人がいて、生命があふれて、使い込まれた物がある。それが、とても自然であるがままの状態であると同時に、そのすべてが一つの奇跡である。そんな気が始終していました。

現在の地球があるまでに、三回ほど神の手が働いたとは思えない奇跡がある。一つは、太陽系、地球ができたとき、一つは、生命が発生したとき、最後が、人類が分化したときだと言われています。そんな奇跡。あるいは偶然の微妙な積み重なり。

そして、私が私のところに返ってきた。十五の頃、迷子になって、それからずっと迷っ

ていた私が、今、私のところへ返ってきたな
って思います。

ところで、セッションの内容、何を話した
のか、その内容をちっとも覚えていません。
なんときれいさっぱり忘れてしまっている事
か！

色々な人々に出会いました。一人一人の印
象は、その時の心の動きと共に、とても鮮明
に焼き付いています。ところが、何があつて
何を話したのかはきれいさっぱり、すっかり
忘れている。言われたら思い出すのですが・
あまりに何もないので、少しとまどってい
ます。でも、イメージは、はっきりと残って
います。

EXPRESSION・表現

清里の自然、出会った様々な人々、そこに
は、一つの世界があったと感じています。ま

るでギリシャ神話の世界のよう。感情とエネ
ルギーに満ちあふれた誇り高い人々と、神様
達が側にいるギリシャの劇的空間。……そ
れが、私にとっての清里。

ギリシャの神々、超越者でいながら、とて
も人間的な感情を持ち、行動をとる。古代ギ
リシャでは、演劇コンクールの評決で、投票
の半分だけを明け、残りの半分はそのまま見
ずに優勝を決めたそうです。この方法は、目
に見えないけれど、偶然を支配する神様のた
めに審査員の席を一つとってあるように思い
ます。神様さえも、審査員になってしまうギリ
シャの人々の世界。

例えばソフォクレスが描いたオディプス王
は、その後、嘆き悲しみと一緒に、自らの運
命を引き受けて、しかし、それに屈服する事
なく、放浪を続け、ついに自らの運命を司っ
た神々と和解する物語で終わります。

一番つらかったときは、亀が甲らに隠れる
ように、手足や頭を縮めてじっとやり過ごし、
ちょっと状況がよくなりかけて、何とかしよ
うと思ったときに出会ったのがギリシャ悲劇。
悲劇だから、憎しみや嫉妬、裏切られた愛と
いった普通つき合にくい感情に満ちあふれ
た物語。運命にもてあそばれる人々、それ
も運命と闘い、受け入れながら屈服しない人
々の物語。人間が、そのまま人間である世界、



それが私にとっての清里。

SOUVENIR・贈り物

最後のコミュニティで発言しました。「人と正面から向き合って出会うということが、こんなにも生きるエネルギーになることを初めて知りました。」と。

朝の気功で、私の体の中に流れができ、他の人々の様々な言葉や表情や行動に反応する。一つ一つの出会いがエネルギーに変わっている。こんなにもよく動く、エネルギーに満ちあふれた自分に出会えて、とてもうきうきした気分でした。

そして、清里というお互いに信頼しあった場の中で、感情を分かち合うという経験ができたと思います。辛い事、苦しい事から生まれる感情や寂しさは、なかなかつき合えませんが、ある状況の中で、ある辛い体験をすると、その時感じてしまうことは誰だって多少の差はあれ感じるのですが、やはり、それを受け止めるのは、一人だと本当にしんどい。自分で押し殺して、ないふりをしようとしてしまう。他人に、同情なんかされたくない。自分をあわれんだってどうしようもない。あるいは、そこに溺れて、悲劇のヒロイン（ヒー

ロー）になってしまう自分がいる。でも、辛い事、苦しい事から生まれる感情や寂しさを、それはそんなもんだと、そのまま受け止めてくれる人と分かち合うことができれば、初めて、自分の中でそれらの感情が生まれる要因になったことが、客観的に冷静にみられるように思います。そうすれば、こだわりが消えて、しなやかに感情が流れ、他の様々な場で、まわりの人々や物事に対して素直に受けとめ、率直に表現したり、行動したりできる。それは、自分に対して、他者に対しても、より確固たる信頼を生み出す状態を作ることにつながると思います。こんな事が、実感できて、とても幸せな気分でした。

大阪に帰ってきて、また、怠惰なもんぶりとした動物園のカバのような生活に戻っています。現実の方は、なかなかそれを許してはくれないほど追いかけてきますが……清里では、体も筋もしなやかに伸びきって、前屈すると足に胸までびったりとついたのに、今は、少し固くなって、すき間が開いてしまいます。

もんでん みちこ

●大阪府立盾津高校

アンデレホールへ、ようこそ

水田 勲

起

「みなさん、しばらく目をつむり、ピアノのメロディに、耳傾けてみませんか。

……。(戦場のメリークリスマス)

ありがとうございます(拍手)。Oさんでした。

さて、幕開きは、Oさんのピアノでした。これからパーティを始めてゆく訳ですが、ここでひとつ、みなさんに提案があります。みなさんと、あることを行ってみたいのです。私にとりまして、先行きの分りかねるものとして、みなさまの御協力をここでお願い致しまして、ある一つのものをつくり上げてみたかと思っております。

それは、一人一語の、全員による『清里・宇宙の詩』を、つくってみたいのです。

一人一語の発声は、今の自分の心境なり、

思いを凝縮するものを、じっくりと探されて、自分の好きな時にお願ひ致します。ただし、一語一語の間隔は適度にあげられますよう、宣しくお願ひ致します。お一人一語です。お分りになりましたでしょうか。

何分、私にとりまして初めての試みですので、ちょっと楽しみであります。

それでは、始めたいと思います。」

(瞑想のテープが流れる)

……(沈黙)

承

清里を訪れた。今回で二度目だ。今回は、愛媛県から車で訪れた。実に長旅であった。

目的は、この五泊六日のエンカウンターと、五日間の『障害者との舞踊劇ワークショップ』であった。後者が、先にあった。

清里までの五日間で、すっかりと非言語的世

界に没頭し、『音』『動き』に敏感に反応、うごめく身体細胞を自覚していた。

清里の生活が始まるや否や、言語、それも言葉の世界が展開されているのに、むずがゆい居心地の悪さを感じていった。

ところが、幸運にも、時機応来たるは、インテレストで木村易先生によるボディワークが用意されてたことである。

その、ボディワークの、ある一コマ。

静かに身をうつぶせて横たわる僕。そのかたわらに四人が座り、僕の身体に各人両の手をのせる。やさしくのせられてる手、八つ。

「寝ている人の息づかいが感じられるように……」との木村先生の指示。

しばしの間。

いやあ、驚いた。感じる。一人一人の手の肌触りの違い。それよりもましてや、熱い。接触面の熱さ。自分の身体丸ごと一つ、手足などまるでないかの如き意識丸ごと一つに、熱き手がのせられている。体感。ほてる生体。「あなたのふれた所から、あなたのやさしさがしみてくる。」

星野富広氏の詩、この一節を実感する。

後の話で明らかとなるのであるが、両の手をのせた側からは、僕の身体からエネルギーをもらったとのこと。

なるほど、交代して実感する。

ボディワークは、さらに色々、様々に展開。言葉でない、体感的世界が、より深い何かを揺り動かしていく。

「ッふれあい」と言うよりも、ッいやしいの言葉が、なにかびったりとする。」

そんな当意、的を得た言葉を耳にした。

エンカウンター風の土そのものを、構造的、心象風景の意味として感得。妙に納得する僕。

このボディワーク、さらに展開されたダンスワーク。限られたワークにしても、凄かった。

僕はみんなに大事にされている。他者からの触発。自分で自分を語ってゆく。自分をもう少しく自分に勇気を。思い切る。面白み、意外と。創造的。言葉と身体と、混然一体化。

転

パーティの司会をやった。昨年の仲間、そして新しい面々と。

冒頭の言葉は、パーティ・オープニング・スピーチである。

O氏のピアノ曲、戦場のメリークリスマス。静かなる調べ、清泉寮・アンデレホールに音がしみ渡る。一人一人に、しみ入るように思える。

その後、拍手の響き。そして瞑想の曲。ボディワークの時に流れた曲。あの時と違って軒をかく者は居ない。静かなる導入。消灯。僕の呼びかけ、実験的なもの。一人一語。期待して、待つ。……。ただ、待つ。沈黙。曲のみ流れる。曲に、心臓の鼓動がオーバーラップ。

しばしの、間。

「沈黙」

沈黙を破る「沈黙」なる声。始まった。

一語、一語。声が、ゆっくりと連なっていく。

司会パートナーのK氏、薄闇の中、僕の方を振り向き、お釈迦様の右手の、まん丸い輪っかをつくって見せる。思わず、ほほえむ僕。声。一語。間。連なる。

ふと見るや、その当の彼、スクッと立ち、両の手を揺らしている。曲に揺れ、詩の糸口を両の手がタクトの如き泳いでいる。詩の誕生、それに酔う詩人。僕の目には、そう映った。

この薄闇の中、僕は、声を聴き、同時に、

「声」として視ていた。意志もつ「声」。

……と、「涙」。その声が木訥した。

僕の心が動いた。すかさず、突き動かされた言葉が、僕の口から飛び出た。

「お母さん。」

母の顔が暗闇に映し出されている。こんな

自分に驚いている。そして、「涙」に続く「お母さん」のつながりを、映像と余韻で味わっていた。つと、ある意味が見えてくる。頬がゆるんでくるのを意識する。グループセッションでの語らいもだぶっている。しばし。はたっと、僕は我に帰る。役柄を意識した。

「光」「朝」

しばらく僕の耳には、声としての内容も、意味も成立しなかった。詩を聞けてなかった。そして、司会者を意識し始める。声が入る。

間延びするような展開。宴に移行しないと、そんな気持ちの僕の大部分を占め始めた。

明かりをつけ、終結を誘った。

参加者一同のまぶたが開かれるのに合わせて、僕の描いた絵を、目に入るよう設定する。

「そろそろ宇宙から、このアンデレホールに降り着いて下さい。ゆっくりとまぶたをあけられ、パーティ会場にお戻り下さい。」

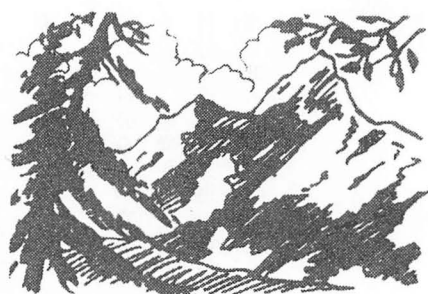
ようこそ、アンデレホールへ。」

宴たけなわ、こんな言葉が訪れた。

「僕は、詩の一番最後に、ねらった言葉があったんだよ。いつの間にか終わり、言えなかったよ。」

すると僕、「あー。何やったんですか。」

「みんな、幸せになるんだよ。」そう言いたかったんだよ。しめくくりになっ。」



詩は、未完成であった。その言葉と共に、気づかされた。

でも、それもこれも、勉強や。気分の良い言葉も贈られたし、嬉しいこと、たくさんあったし、まあ、ええやないか。

『清里・宇宙の詩』は、企画以上の効果を、僕自身にも与えてくれていた。

僕自身の、内なるものからの発声は、翌月の最終セッションに、地殻変動めいた奥底からの噴出をもたらした。

後日談で判明、「お母さん」に続く声。なんと詩的なまでの、相応しい言葉であった。

「愛。」

未知なる素晴しき出会いは、配置されていた。

結

「アンデレホールへ、ようこそ。」

「アンデレ・ホール」を、僕は「アンデレ（別次元の）・ホール（空間）」と読んだ。そう読める。読むと面白い。

パーティも、毎夜の飲み会（交流アワー）も、ボディワークも、最終日のミーティング

も、ここ、アンデレホールで行われた。

後日、カメラマンより、この貴重なパーティの一瞬一瞬が贈られてきた。懐しい限り。美しい写真たち、大いに物語る。

参加者一同の共通体験。おんなじ感慨。

思い出してみようでないか。

スタッフ一同の歌。語り。

みんなの宴げ。はしゃぎ。

僕にとって、印象たる一枚の絵。僕の描きし絵。記念写真の背景に納まっている。

そこから眺めてみる。観る。

見ようによって、立ち止まらざるを得ない。その絵の、両の腕に納まりし人々たち、己自身。

不思議なる絵巻かな、この写真たち。

不思議なる感慨。僕の描きし両の腕よ。

「アンデレ・ホールは、そこそこに、あなたの、すぐそこ。」

腕

そうかいな。

双腕。

みずた いさお

●愛媛県立今治養護学校

心気功を実践して

山本 房子

はじめに

私が「気功」を始めて体験したのは、一九八九年六月に、人間関係研究会の主催する「気功とエンカウンター・グループ」に参加した時であった。緑の山々に囲まれた会場の外庭で、大気を吸いながら受けた『気』が、

体の血脈の流れを良くしたようであった。そして、不思議な魅力に取り付かれたかのように、気功カウンセリングを続けて、永年に亘って求め続けていた「人の自由」をようやくにして、体得できたように感じている。これまでの成長のプロセスを追ってみたいと思う。

その一

夫婦が共に定年退職したのを期に一九八九年四月、長男の住んでいる東京に転居した。

この頃は、我が家の凶年十ヶ年とも言えるような頃で、家族は不安定な心理状態の生活

を続けていた。何とかして自分の生き方を見直そうと思い悩んだが、どうにもならない。内面を見ようとしても、過去の経験がみんな自分の外側を空廻りしてきているように思えてならなかった。心と体のアンバランスが、身体の苦痛を引き起しているのにも気付いていた。

武蔵野の面影を充分に残した中に、文化的な要素を織りなす東京郊外で、長男と共に暮し始めてみると、こゝで、何かが、呼んでいるような気がしていた。

九月の下旬、暑い夏が過ぎてホットした途端、足の湿疹に水泡が出て、痒みが日増しに激しくなってきた。箱根のワークショップでの「気功」を思い出して、グロース・センターを訪れることにした。

その二

「日本グロース・センター」は、人間関係研究会出版の「出会いの広場」に紹介されて

いるとおり、年間の計画が実施されている。木曜日の気功カウンセリング教室に行っていると、柔かい雰囲気の中で、七、八人が輪になって、それぞれが自分のことを語り合っていた。私もその中に溶け込んで、胸の奥に綴じ込めてあった、次男の交通事故死への思いを、ついに吐き出して、現実を認めることができた。

話し合いの後は、大須賀先生から、内気功を教えていただく。内気功は、先づ体を真っ直ぐにして肩の力を抜く。鼻から息を吸って口から吐く。暫らく黙想をする。両手を静かに挙げ、降ろして呼吸を整える。先生を輪に囲み静かな中にも整然とした凛々しさは、心身のバランスが整って気持がよい。心身を最も自然にさせられる。

内気功のあとは、先生から外気功を受ける。湿疹部分がポツと温かくなってきた。隣の人体が揺れている。次の日の入浴後には水泡が乾いているのに驚いた。暫らく続けようと思って入会した。二回目には体の中を風が通るのを感じ湿疹は治ってしまっていた。

それからは先生の刊行された本を次々に読んでいく。私よりも主人の方が先に読んでしまっている位に関心を持ち始めているのには驚いた。家の中で内気功をしていると家族に気が伝わっていくように感じる。息子も「ゆうばうと」で開かれた人間学講演会に出席して、



気の流れを身に受けて実証をしてきた。

武蔵野の自然の中に心の自由が存在していると膚で感じ、東京人の自然体を私は羨やましく思っていたが、この気功教室の中で、はっきりと自然体を見つけ、私の目あてにしていた「自由人」への成長のプロセスに、明るさが見えてきた。

その三

グロース・センターのこの自由の場に、週一回通い続けていると、内面が宇宙に連携されているように感じて、自分の人間性が変わってきているように思える。体内での気の流れが、物の視方、聴き方、感じ方を素直にさせてくれる。話す言葉も変わってきていると感じた辺りから「夫」の変化を見つけた。池袋教室から帰って話す私を、しっかりと見つめ、話を取り上げて自分の中に溶かしていこうとしている姿に心打れたこともある。私よりも早い速度で成長し「句作りは、人作りから」と燃えているのが伝わってくる。私の成長のプロセスが進むにつれて、息子への対応が変わってきたのか、親子離れの葛藤が始まり、何がどうなっているのかわからないうちに、夫々が自立へと向ってきているようである。

折に触れての記録の中には、いろいろな場面で、気功によって、内面を見つけていける

楽しさ、豊かさを味わってきているし、また相手と同行することの心地良さをも、感じてきている過程がよくわかり、自分自身を温めている。しかし時折り、ストレス過剰になると、内気功をしてバランスをとる方法が続いていこうと思う。

まとめ

「気功法」は広く健康法として知られているが、グロース・センターでは、気功とカウンセリングで自分に感じていないところを意識化することで、自分を知り、自然体の中で、心の成長を促すところの「心気功」であることを実践した。この記録を綴ることが、また、一学習になったと感謝をしている。

嵐のエンカウンター・グループ (1)

団 士 郎

プロローグ

いつか書かなくてはならないことだろうと思いつながら、十年近い時間が過ぎてしまった。今、この時間の力が、私にゴー・サインを出している。しかし書くことによって嫌な思いをする人があるかもしれないという懸念は、時間とは関わりなく健在だ。

それでも「Encounter」に何か書くなら、あのことを置いて他にはないと思う。私にとって、他の経験とは替えがたい大きな出来事だった。決心したら文字にすることをためらわせるような疑問があるわけではない。振り返るとこれまで、不用意に簡単に話してしまったり、手短かに書いたりはしなかったことだなあと思う

だけである。大層なはじめ方をしていると自分でも思うが、これはやはり私にとっては消えることのない心の傷であり、同時に大きい財産でもある。従って今から書こうとすることは、事実の記録ではない。これは私の体験したこの話である。多少の心配は、我が身に起こったと私が受けとめていることを、そのサイズでうまく書けるだろうかということだけだ。

突 発

もう忘れてしまった人もいるだろうが、忘れられないでいるのも私だけではないだろう。あれは1982年、夏の清里のことだった。グループの初日、まだセッションが始まったともいえない時間、

二人の女性参加者が、男性の参加者からつかかれた。グループは騒然となった。ファシリテーターはN先生、ファシリテーター養成訓練を受けていたOさんと私がコ・ファシリテーターだった。同じ時間、清泉寮では他にも四つのグループが同じスタッフ体制でスタートしかけていた。

はじめにつっかかれた女性（Sさん）は、すぐ外科に連れて行って治療の必要な状態だった。二番目につっかかれた女性（Tさん）は、外傷こそひどくはなかったが、かなりショックを受けていた。つかかった男性（Aくん）がその時どうだったのか、私には記憶がない。とにかくあつという間の出来事だった。そしてグループ参加者の反応もまた素早かった。

台風

とにかくあの時のプログラムは初めから大変だった。ファシリテーター訓練プログラム中に、台風が本土に接近してきていた。本来は避暑のピーク・シーズンを迎えているはずの夏の清里が通過コースに入った。思いもかけない自然の猛威に、鉄道や道路はズタズタというニュースが次々飛び込んでいた。本部スタッフの人達は、グループの開催が予定どおり可能なものかどうかを、検討していた。そんな中にファシリテーター・トレーニングを受けていた私を含む十人がいた。既に五日間ほどの合宿生活をし、いろいろな角度からグループについての理論等も学んでいた。向田邦子のエッセイに、台風を迎える家族の興奮気味のエピソードを綴った話があるが、嵐を迎える館内もそんな感じだった。テキパキした指示がとんだり、とても速やかな対応策がつつぎつつぎ出ていた。コ・ファシリテーター

のベアを決めるだけで、半日以上費やしてしまった数日前の私達のE・G・精神からすると、驚異的な事態の展開だった。

結論としては、清里に向かっていている人達のためにも、グループを中止することはできない。しかし残念ながら来ることができない人達はキャンセルも受け入れよう。四泊五日の日程を、一日遅らせて三泊四日でスタートしよう。そして到着した人達の数にあわせて、グループを再編成しようということだったと思う。

この台風は、八ヶ岳高原をプロローグからエピソードまで、しっかりと通り抜けた。高原ロッジの窓から眺める嵐は、相当なものだった。参加人数が減れば、グループ数も減らざるを得ない。するとファシリテーターの体験実習も訓練受講者全員は無理かもしれない。私はせっかくのファシリテーター初経験のチャンスが遠ざかったのが残念のような、それでも良かったような微妙な感じがしていた。

しかし実際には、こんな台風の真只中にもかかわらず、参加予定者はひたすら清里を目指していた。小海線清里駅からは遥か遠くの駅前から、寸断された道路の迂回路の富士山の見える峠から、またあわただしい喧騒のターミナルから、電話がひっきりなしに入っていた。そして予定時刻より半日、一日と遅れて、まるで荒海を漂流する人達が流れ着くかのように参加者が一人、また一人と、ずぶ濡れで清泉寮の玄関に到着していた。それをスタッフや、先に到着して体を暖めて一息ついた参加者が、抱きかかえるように迎える様子を見てみると、もうそれだけでこのプログラムは意味があったのではないかと思っていた。しかし私にとってのグループは、実はまだ何も始まっていなかった。私が嵐の中で時間を過ごすことになるには、もうしばらく時間があつた。そしてそれを私は知らなかった。

E・G

予定どおりなら始まっているはずの日、訓練生の私達もスタッフと一緒に、宿舎をロッジから本館に移動した。いよいよ明日から、一般参加者のグループを迎える緊張と、思いがけない事態の緊張が重なっていた。だから余計に、訓練生グループの連帯感も高まっていた。

一日遅れでスタートしたE・Gの参加者は、結局申込のあった人数を割ったものの、グループの数を減らさなければならぬほどではなかった。それより、まだ遅れてでも到着する人を、どうグループへ受け入れるかが検討されていた。

そしていよいよ割り当てられた編成で、E・Gが始まった。各グループのスタッフとメンバーが決められた部屋に集まった。名簿にはあるが、未着の人もいるという状況だった。

そして・・・

既に顔見知りの人達以外は、まだお互い何もわからないうちに、なぜあんなことになってしまったのか、語るべきことが私にはない。以前からAちゃんと知り合いだった人達もいて、その人達の話を断片的に聞いたような気もするが、あやふやである。とにかくそれはいきなりの出来事だった。

AくんのTさんへの馴れ馴れしい振る舞いに対して、向かい側にいたSさんが「止めなさい」と注意をした。それに対してAくんがSさんを突いた。自分に関わることで、Sさんがとんでもないこと



になったと驚いたTさんが、そのことを批判した。するとAくんは、かえす刀でという感じでTさんも突いた。あとは大混乱である。私もびっくりして混乱していた。予想もしたことがない事態だった。騒然としている状態で、何か言っていたような気がするが、覚えていない。Sさんを助ける人、Tさんを支える人、Aくんを止める人入り乱れているようでテキパキと、しなくてはならないことが行われた。Sさんはすぐに病院へ行く手筈を、他の二人もそれぞれ別室に連れていって対応をした。N先生が誰を、Oさんが誰を、七、八人は居たと思うメンバーが、それぞれ誰についたのかは思い出せない。ただ自分が動けないであっけにとられて見ていたことだけ覚えている。

嵐の後

そして部屋には誰もいなくなってしまった。それほど大きくもない古びた和室だが、人がいなくなるとガラーンとしてしまう。私は何も考えられないで、事態に圧倒されたままじっと座っていた。「どうしてこんなことになったのだろう」と頭の中では繰り返し問いかけてみるが、納得のいく答などなかった。

自分が動けなかったことを悔やみはじめていた。しかしそれは情けないことに、果たすべき役割を果たせなかったと思う後悔よりも、今自分がこんな状態で残されてしまったことへの後悔の方が大きかった。それにこれからどうなっていくのか、見当がつかないことが無性に頼りなかった。

そのうち誰か部屋に戻ってくるかもしれないと思っていた。そうしたら、たいした内容などなくても、とにかく話せる。「どうしようねえ」とか「どうしたらいいだろう」とか言うつもりだった。

しかし実際は誰も戻っては来なかった。腕時計の針はゆっくり回っていた。そして私にはいまさら行くところがなかった。話しかける相手がなかった。「なにを言っているんだ、あんなことがあって大変な中で、みんな対応に走り回ってくれているんじゃないか」

何度も何度も自分にそう言い聞かせようとした。しかし誰もいない部屋の、崩れた円形の座布団の輪に、一人で座り続けていると「なぜこんなことになってしまったんだ？」とまた同じことをつぶやいてしまうのだった。

時々、廊下を人が通る。近づいてくる足音が聞こえると、この部屋に関係のある人だろうかと期待する。開けたままの入口に、急ぎ足で駆けてゆく人の横顔がチラッと見えて、そして遠ざかっていく。何度かそんなことを繰り返し続けた。

ちっともたたない時間のなかで、どこにも行く場所のない思いで座っていると、どんどん惨めになってゆくのだった。何よりも耐え難かったのは、今こうして私がここに一人居ることを誰も知らないということだった。なんの役割も果たしていないコ・ファシリテーターであることが、底なし沼のように情けなさを深くした。一歩も動けないでじっとしていた。

そんなとき、トイレに行きたくなった。嬉しかった。動く言い訳ができたような気がした。誰もいないところで「・・・トイレ、いってこう」とつぶやいて立ち上がった。やっと休憩してかまわないう時間のように思えた。トイレを済ませて、手を洗って、少し息ができた。しかしその後はまた、行くところはどこにもなかった。他のグループのことを思った。各グループともに、いろいろなことがあるに違いない。大変さはどこも同じだということかもしれない。でも少なくとも、メンバーはみんな部屋にいて、話したり、黙っていたりするだろう。どうして私のグループだけが、誰もいなくて、どこに居るのかもわからないだろう。選りによって、なぜ自分にこん



なことが起こるのだろう、そう思いながら、結局戻るところはあの部屋しかなかった。

誰か戻っているかもしれないという期待は、もう失くしかけていた。予想通り誰もいない部屋が待っていた。ガラガラの特急自由席みたいに、どこに座っても同じなのに、先程の場所に座った。そして時間が過ぎてくれるのを待っていた。時がたてば事態も変化するなどと考える力は無くなってきていた。無理をお願いをして、この訓練に参加させてもらったことが気になりはじめていた。なぜこんなことに首を突っ込んだのだろうと後悔始めていた。

ランチ・タイム

昼食時間が近づいていた。清泉寮の食事は気持ちがいい。きれいな食堂でグループで大きなテーブルを囲む。昨日までは、訓練生の仲間とスタッフ全員でワイワイ言いながらの食卓だった。それを思うと余計食堂には行けなかった。ほかのグループの人達が、午前のセッションが終わって、そろそろ食堂へ向かう。前の廊下を通るとき、私のいる部屋はガランとしているから、もう既に終わって食事に行っているグループに見えただろう。しかし食堂に、私のグループの人達はいない。でもそんなことを「おかしいなあ」と気がつく人は誰も居ないだろうなどと考えていた。そしてそんなことを思っているのは自分一人だろうなあと、寂しくて笑った。プログラムはまだ始まったばかりだった。今からの時間が無限よりも長いような気がしていた。

つづく

だん しろう

● 京都府京都児童相談所

第八回表現療法国際研修プログラム

ナタリー・ロジャーズなどの、パーソンセンタード・エクスペリエンシャル・インスティテュート主催、一九九一年プログラムが次のように開催される。

レベルⅠ（七月八～一四日、四七五ドル）、Ⅱ（七月二〇～三〇日、七五〇ドル）、Ⅲ（一月九～二〇日、七五〇ドル）、Ⅳ（インターンシップ、四七五ドル他）。

これとは別に、週末プログラム（九月開始）、英国（リバプール）プログラム（レベルⅠ、八月十一～十六日、五二〇ポンド、Ⅱ、八月二十二～九月一日、七六〇ポンド）が新しく増加した。費用は、研修費・宿泊・食費をすべて含んでいる。

申込・問合せ先 Person-Centered Expressive Therapy Institute, P.O. Box 6518, Santa Rosa, California 95406, U.S.A.



パーソンセンタード・アプローチの国際研修プログラム

Center for Studies of the Person (CSP) が、一九九二年度から新しく心理療法師（個人、グループ、家族など）養成研修の二年間プログラムを作り、世界各国からの参加を呼びかけている。このプログラムのコーディネクターは、スザンヌ・スペクターとマリアン・ボーエンの両女史である。

第一年度は、一九九二年八月、三週間にわたるカリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）会場でのワークショップを皮切りに、その終りに、各参加者が一人の指導者と三人の仲間を選び、以後自国に帰って、隔月毎の拠点地域での集会、四回の週末セミナーなどをもつ。そこでは、自己理解、自己受容、自己表現などの体験的研修と、知識学習、スーパーヴィジョンを伴う相互研修を行う。サティフィケート（修了証書）必要者は、一年後に自己評価書を提出することが求められている。

第二年度は、一九九三年七月の、ヨーロッパでの一週間のインテンシヴ・トレ

ーニングに始まり、進んだ専門的研修と最低五〇時間のスーパーヴィジョンを予定しており、修了者にはディプロマ（免許状）が出される。

このプログラムには、CSPスタッフがスーパーヴァイザーとして参加し、カール・ロジャース記念図書館とカリフォルニア大学サンタバーバラ校のヒューマニスティック心理学アーカイヴ（記録保管書）所蔵のフィルム、ビデオ、その他の資料が利用されることになっている。

一年目の研修費は、三千ドル。UCSDの宿泊費は、一日一人部屋五〇ドル、二人部屋四十五ドルで、いずれも朝食代を含んでいる。

問合せ・申込先 Nel Kandel, Carl Rogers Memorial Library, 1125 Torrey Pines Road, La Jolla, California, 92037, U.S.A.

ラホイア・プログラムは今年度中止

長年、日本人参加者が相次いだラホイア・プログラムは、一九九一年度は中止の旨、ディレクターのブルース・メードウさんから報告があった。来年度は再開したい由。

第四回人間中心の教育セミナー

期日 一九九一年八月二十七日(火) 十一時より 二十八日(水) 十七時まで。

会場 大阪なにわ会館

会費 六〇〇〇円(学生五〇〇〇円)

定員 百名

セミナーの内容。

〈講演〉「人間中心の教育をコミュニケーションの原点から考える」(関丕)
〈ワークショップ〉

1. 教師性をたがやす(河津雄介)
2. 人間中心の授業としての「ひとり学習」
(田中義人、野鶴広士、古賀一公)
3. 非言語的感性トレーニング(小島新平)
4. フリーラーニング(関丕)
5. 人間中心の教育を考える(畠瀬稔)
6. 傾聴できる自己へ(増田實)
7. 登校拒否の生徒とともに(村田進)
8. 学級造形法(八尾芳樹)

〈パネルディスカッション〉

「人間中心の教育に向かって―何をどう変えていくのか」

(河津雄介、野鶴宏士、堀真一郎)

申込・問合せ先 〒545 大阪市阿倍野区

王子町一―五―十一 水野方 人間中心の教育研究会大阪事務局(郵便振替口座大阪一―一〇七五九八) ㊦〇六―六二八―一七三八一(夜八時―十時)

『人間中心の教育』No.8発行

人間中心の教育研究会機関誌で、毎年一冊刊行している同誌が、日本における人間中心の教育の現状を探る特集を組んでいる。

第一部では、「きのくに子どもの村」という、ニールの実践の学校づくりが軌道にのったこと(堀真一郎)、「同校教育の課題と展開」(伊藤隆二)、を始め、合流教育による個性形成授業(河津雄介)など、人間中心の教育諸理論も多様である。

第二部では、小学校での学級経営における実践(刀根良典)、学級全員参加の国語授業(八木幾子)、高校での落ちこぼれを防ぐ工夫(中田悌夫)が報告されている。

第三部は、海外レポートで ロスアンゼルス の全米最古のフリースクールと言

われるブレイ・マウンティン・ブレイス校への留学体験記(山下和夫)である。

日本の各地でさまざまな試みが展開している様子は、わが国にもすでに土着の人間中心の教育が開化しつつあることを印象づけられる。

申込先 〒814-01 福岡市城南区飯倉一―一―一九 福岡学習援助センター内、人間中心の教育編集部(㊦〇九二―八三一―六三〇四) 郵便振替 福岡八―三〇六七一、特集号 一部五百円、送料 百円。(以上、文責 畠瀬稔)

わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献のリスト

(一九九〇)

福岡大学の野島一彦氏は、一九八〇年から日本における「集中的グループ経験」に関する文献リストを作成し、その後毎年、追加しております。この度九〇年度のリストができました。九〇年度中に発表された論文や報告、学会発表が網羅されている貴重な資料です。

ご希望の方は、野島氏までご連絡ください。また、「集中的グループ経験」に関する論文を書かれた方は、抜刷りを送

付するなど研究にご協力ください。

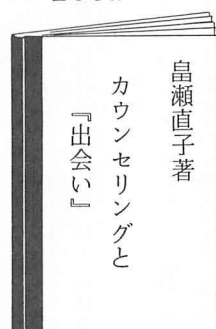
問い合わせ先

〒814-01 福岡市城南区七隈8-19-1

福岡大学文学部 野島 一彦

☎092-871-6631

Book



一九九一年五月創元社刊

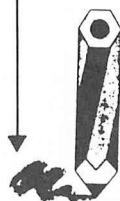
本誌「出会い百選」でおなじみの島瀬直子氏の新しい著書が出版されました。

堪能な英語を生かして、世界の臨床心理学界で活躍されている筆者が、これまでの自身の「出会い」体験について、心をこめて語っています。

カール・ロジャーズ、ブーバー、アンナ・フロイトら先人達の「出会い」体験に始まり、自身の臨床実践研究へと、終章では「出会い」体験について臨床心理学的検討が加えられています。

カウンセリング、エンカウンター・グループの世界へと引き寄せられて、女性サイコロジストとして歩んでいる筆者の足跡を辿る興味深い内容です。

編集だより



■講読申し込み方法

講読は、原則として定期講読制です。

年間講読料(年二回発行)は、一五〇〇円(送料込み)です。No.14からお申し込み

の方は、郵便振替か現金書留にて編集事務局宛お送りください。

単品購入希望の場合、送料および購入方法は左記バックナンバーと同じです。

■バックナンバーの購入方法

No.6、7、8、9、10、11、12は残部があります。ご希望の方は、各号の合計代金に郵送料を加えた金額を、郵便振替か現金書留にて編集事務局あてお送りください。

郵送料は、一冊まで二五〇円、三冊まで三〇〇円、五冊まで三五〇円、八冊まで四〇〇円です。これ以上の場合、連絡いただければお知らせします。

No.6 (一九八七年二月発行 五〇〇円)

No.7 (一九八八年七月発行 六〇〇円)

No.8 (一九八九年一月発行 六〇〇円)

No.9 (一九八九年七月発行 六〇〇円)

No.10 (一九九〇年一月発行 六〇〇円)

特集…教育とエンカウンター・グループ

No.11 (一九九〇年七月発行 六〇〇円)

特集…私のエンカウンター・グループ

と観とファシリテーション

No.12 (一九九一年一月発行 六〇〇円)

人間関係研究会二十周年記念特集号

■次号の案内…一四号は平成四年一月発行予定、十月末が原稿締切です。

E・Gでの体験、研究レポート、本の感想など、各地の活動や会の紹介など、お気軽に編集事務局までお寄せください。また、本誌についてのご意見・感想もお寄せください。

■編集後記…本号では、三名の中堅グループ臨床家に、現在取り組んでいる課題について書いて頂き特集としました。矢幡さんの覚え書きスタイル、そして団さんのイラスト入り原稿と、新しい表現形式を求める本誌の息吹が伝われば幸いです。

■13号編集委員…野島一彦・伊藤義美・小柳晴生 (編集事務担当) 小柳欣子

■講読申し込み先…〒761-01 高松市屋島中町三八三-三・五〇七「人間関係研究会編集事務局」小柳晴生・欣子

☎0878-431-6444

▼郵便振替

振替番号…徳島8-36521

加入者名…人間関係研究会編集事務局

ENCOUNTER

出会いの広場 No.13



発行所 人間関係研究会 1991年7月20日
〒145 東京都大田区上池台1-34-26 (渡
辺方) 編集事務局 〒761-01 高松市屋島
中町383-3・507 (小柳方)
印刷 株式会社美巧社 高松市多賀町1-8-10

ENCOUNTER

No.13 1991. 7

CONTENTS

Special Series : We are now Fully Functioning in Helping Relations

My Note on Person-Centered Expressive Therapy

and Encounter Group.....Yo Yahata

A Report on the Alcoholic ClinicHiroyuki Kisikawa

Development of Counseling and Psychotherapy in JapanYosimi Ito

Research Note

The Effect of PCA Groups in Campus LifeKaori Ikeuti

Encounter Interview(10)

The American Woman: Susan Spector, M.A.....Naoko Hatase

Communication Bulletin

Wandering in a ForestYositaka Sakano

Experience of Kiyosato ProgramSatosi Takamatsu

Welcome to St. Andrew's HallIsao Mizuta

An Impression of Kiyosato ProgramMitiko Monden

My Experience in Program of "Kikō"Fusako Yamamoto

Reflecting the Stormy Days in Encounter GroupSiro Dan

Information

Edited and Published by

JAPANESE SOCIETY FOR THE PERSON-CENTERED APPROACHES

Central Office : c/o Tadasu Watanabe, 1-34-26, Kamiikedai,
Ohtaku, Tokyo, 145 Japan

Editorial Office : c/o Haruo Oyanagi, 383-3 Suite 507,
Yasima Nakamachi, Takamatsu City, Kagawa Prefecture,
761-01 Japan
